

大門東部地区埋蔵文化財発掘調査報告

— 県営ほ場整備事業に伴う試掘調査報告 —

1997年3月
大門町教育委員会

序

豊かな自然に恵まれた大門町には、南方に連なる丘陵地を中心として、各時代にわたる遺跡が数多く存在します。これらの遺跡は郷土の歴史を知るうえでかけがえのない史料であり、当時の生活や先人の苦労を偲ぶことのできる貴重な文化遺産あります。

ところが、土地改良事業や企業団地の造成など、大規模開発が次々に実施されるなかで、貴重な文化遺産が消滅していこうとしています。

そこで私達は、祖先の残した文化遺産を保護、保存し、子孫へ伝えていくことが重要な責務であると考え、県営は場整備事業の実施にあたって、事前に試掘調査を行い、そこに所在する埋蔵文化財の保護に努めて参りました。この報告書はその成果をまとめたものであります。

この報告書が、多くの人々に活用され、地域の歴史の理解と文化財保護の一助となることを願ってやみません。

終わりに、調査にご援助並びにご協力いただきました地元の方々及び、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

大門町教育委員会

教育長 野上和雄

例 言

- 1 本書は、富山県射水郡大門町に所在する県営は場整備事業に伴う試掘調査報告書である。
- 2 調査は、国庫補助金・県費補助金を受けて平成5年度から平成8年度までの4年間実施した。
- 3 調査期間・調査面積は調査の経過に記す。
- 4 調査は、富山県埋蔵文化財センターの指導・協力を得て大門町教育委員会が実施した。調査担当者は調査の経過に記す。
- 5 本書の編集・執筆は、大門町教育委員会 主事 尾野寺克実が行った。
- 6 調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表する。
岸本雅敏・宇野隆夫・上野章・宮山進一・安念幹倫・池田恵子・宮田明・塙田明弘（敬省略）
- 7 発掘調査の作業には（社）大門町シルバー人材センターの御協力を得た。
- 8 遺物整理、報告書作成作業の参加者は次のとおりである。
大川達・近藤美紀・坪田聰子・田中慎太郎・田中幸生・中谷正和・松本茂・工藤直子・平井品子・三浦知徳・山崎雅恵・中島義人・浅野良治・小島あづさ・齊名理史・三浦英俊・小野基・小糸鮎子・西村倫子・荒木慎也・砂田哲司・高橋泰雄・廣瀬直樹
- 9 調査は表土より50cm以内の掘削制限のもと行っているため、試掘トレーニングによっては地山まで達していない箇所があることを断つておく。

本文目次

序	(6) 柳田遺跡	9
例言	(7) 安吉遺跡	9
本文目次	(8) 安吉Ⅱ遺跡	10
挿図目次	(9) 本田天水遺跡	10
図版目次	(10) 本田杉田遺跡	10
I 序章	(11) 本江畠山Ⅱ遺跡	11
1 遺跡の位置と環境	(12) 本江宮田遺跡	11
2 調査に至る経緯	(13) 本江大坪Ⅱ遺跡	11
II 調査の概要	(14) 本田宮田遺跡	12
1 調査の経過	(15) 本田畠山遺跡	12
2 調査結果	(16) 分布調査	13
(1) 二口油免遺跡	III まとめ	14
(2) 二口五反田遺跡	参考文献	
(3) 二口遺跡	遺物観察表	
(4) 本江畠山Ⅰ遺跡	図版	
(5) 本江大坪Ⅰ遺跡	写真図版	

挿図目次

第1図 位置と周辺の遺跡
第2図 分布調査工程図
第3図 分布調査による遺跡範囲
第4図 試掘調査工程図
第5図 調査結果

第1表 分布調査詳細表
第2表 試掘調査年次表
第3表 遺跡総括表
第4表 出土遺物観察表(1)
第5表 出土遺物観察表(2)
第6表 出土遺物観察表(3)
第7表 出土遺物観察表(4)
第8表 出土遺物観察表(5)
第9表 出土遺物観察表(6)
第10表 出土遺物観察表(7)

図版目次

図版1 調査詳細図
図版2 二口油免遺跡出土遺物実測図
図版3 二口五反田遺跡出土遺物実測図
図版4 二口・本江畠山Ⅰ遺跡出土遺物実測図
図版5 本江畠山Ⅰ・本江大坪Ⅰ・柳田遺跡出土 遺物実測図
図版6 安吉遺跡出土遺物実測図
図版7 本田天水・本田杉田・本江畠山Ⅱ・本江 宮田遺跡出土遺物実測図
図版8 本田宮田遺跡出土遺物実測図(1)
図版9 本田宮田遺跡出土遺物実測図(2)
図版10 本田畠山遺跡出土遺物実測図
図版11 分布調査採集遺物実測図

I 序 章

1 遺跡の位置と環境（第1図）

大門町は、県の中央北部、射水平野の南西端に位置し、東は小杉町、西・南は高岡市、北は大島町に接している。地形的には、庄川右岸の扇状地と、丘陵地からなり、和田川が貫流している。

今回、試掘調査を行った大門東部遺跡群は、奈良期の越中国守大伴家持が歌の中に詠んだ「三島野」の地の中核にあたるとされている。標高6m～11mの間で、南から北へなだらかに低くなる。その存続年代は個々の遺跡としては断続的であるが、遺跡群全体としては縄文時代後晩期～近世までの全ての時代を網羅している。

大門東部遺跡群が位置する射水平野や付近の射水丘陵をはじめとする丘陵地は、遺跡の密集地となっており、平野部では、弥生～中世の集落跡が主体をなす。また、標高15～40mの段丘・丘陵上には、県史跡大塚古墳、生源寺新十三塚古墳（消滅）、生源寺新遺跡（縄文・奈良～中世）、小杉流通業務団地内遺跡群などが点在し、さらに、「大沢山」と呼ばれる独立丘陵上には国史跡串田新遺跡（縄文・古墳）が存在する。



第1図 位置と周辺の遺跡

2 調査に至る経緯（第2・3図、第1表）

富山県農林水産部高岡農地林務事務所は、大門町東部地区の地元住民の要望を受け、平成4年度～平成7年度までの4年間にわたって、県営は場整備事業を行うこととなった。これは現況水田6～7枚を1区画とし、基盤整備・改良は行わず、現耕作上の均し（暁倒し）程度の土工であり、農道や用水・排水路は既存施設をそのまま利用する計画である。事業計画面積は137haと広大であり、さらに周辺には周知の遺跡が存在することから、平成4年6月22日に高岡農地林務事務所・町教育委員会・県教育委員会の3者で協議し、同年工事予定範囲16.7ha分について、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て、分布調査を実施することとなった。その結果、4カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されたため、7月15日、再度3者で協議を持ち、試掘調査を実施することとなった。これを皮切りに、その後、は場整備事業区域内全域を対象として、分布調査を3回に分けて富山県埋蔵文化財センターの協力を得て行った。その結果、15カ所の埋蔵文化財包蔵地を確認した旨を同センターより報告を受け、埋蔵文化財包蔵地及び隣接する範囲について試掘調査を行うよう指導を受け、年度毎に工事予定範囲について、順次調査実施することとなった。

調査次数	地 区	期 間	調 査 判 当 者	調査面積(ha)	確認した遺跡	遺跡面積(m ²)	試掘調査後の遺跡名
第1次	二口・棚田	H4.6.25 (1日間)	富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 島 田 修 一 岡 本 淳 一郎	16.4	No.1遺跡	4,500	二口油免遺跡 二口五反田遺跡
					No.2遺跡	5,000	二口五反田遺跡
					No.3遺跡	35,000	二口遺跡
					No.4遺跡	32,500	試掘で確認できず
第2次	二口・棚田	H4.12.14 (1日間)	富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 島 田 修 一 岡 本 淳 一郎	26.0	No.5遺跡	35,000	二口油免遺跡
					No.6遺跡	19,000	二口油免遺跡
					No.7遺跡	3,500	棚田遺跡
第3次	二口・棚田	H5.4.20 (1日間)	富山県埋蔵文化財センター 主任 斎藤 隆 橋 本 正 春 文化財保護主事 島 田 修 一 岡 本 淳 一郎 伊 佐 智 法	14.0	No.8遺跡	22,650	棚田遺跡
					No.9遺跡	13,000	棚田遺跡
					No.10遺跡	5,700	棚田遺跡
					No.11遺跡	13,750	二口五反田遺跡
第4次	安吉・本田 木江・中村	H5.12.13 ～14 (2日間)	富山県埋蔵文化財センター 主任 橋 本 正 春 文化財保護主事 島 田 修 一 岡 本 淳 一郎 伊 佐 智 法	73.1	No.12遺跡	139,250	本江畠田Ⅰ遺跡 本江畠田Ⅱ遺跡
					No.13遺跡	63,250	本江大坪Ⅰ遺跡 本江大坪Ⅱ遺跡
					No.14遺跡	45,000	本江宮川遺跡
					No.15遺跡	66,750	二口遺跡 安吉遺跡
					No.16遺跡	53,750	本田天水遺跡
					No.17遺跡	52,000	本田杉田遺跡
					No.18遺跡	63,120	本田畠田遺跡
					No.19遺跡	78,630	本田吉田遺跡

第1表 分布調査詳細表



第2図 分布調査工程図



第3図 分布調査による遺跡範囲

II 調査の概要

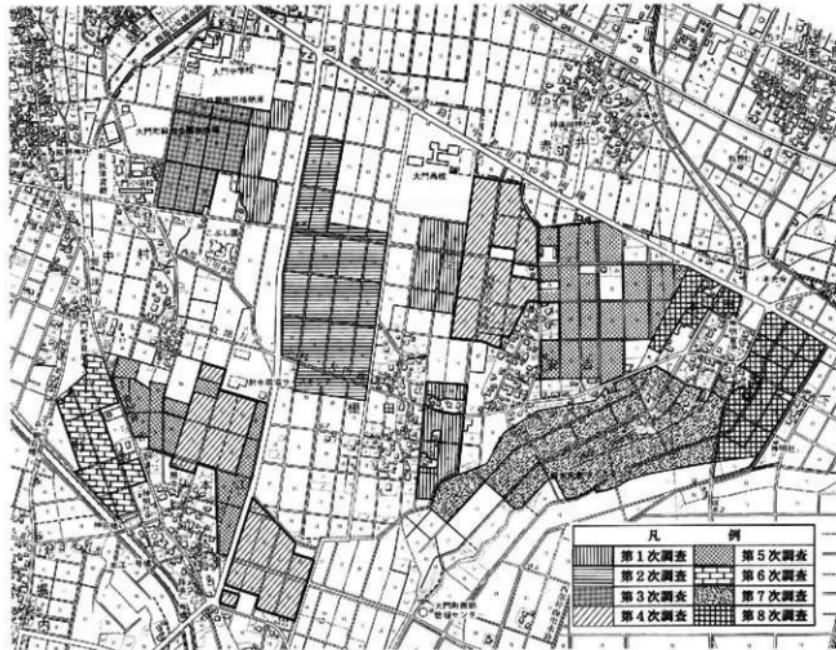
1 調査の経過 (第4図、第2表)

調査は、調査区全域でバックホウ及び人力によって幅1mの試掘トレンチを設定し、遺構及び遺物の遺存状況を確認する方法を取った。しかし、平成5年6月の第2次試掘調査中、農作業に差し支えるため試掘トレンチの掘削深度を浅くしてもらえないか、との強い要請が地元からあり、急遽6月24日に協議を行った。その結果、それ以後の調査では調査深度を50cm以内に収めることとなつたため、遺構検出面まで掘削深度が及ばない箇所がある。従つて、暫定的な調査結果しか得ることが出来ず、今後、当調査範囲で何らかの開発が生じた場合は、再調査が必要になる。

平成6年、中村地区がは場整備事業対象地区から除外することになり、同地区は調査対象から外されることとなつた。

平成7年4月28日の協議では、同年で調査終了の予定であったが、他の緊急調査との調整により、同年度調査対象地の一部を翌平成8年度に持ち越すこととなつた。

なお、試掘調査完了時には、その都度3者で協議を行い、工事によって地下の遺構・遺物包含層に影響を及ぼす箇所については設計変更を求めた。その箇所については高岡農地林務事務所、及び地元住民の協力によって盛土工法に切り替えられ、その保存に努めた。



第4図 試掘調査工程図

調査次数	地区	期間	調査担当者	調査面積(m ²)	発掘面積(m ²)	確認した遺跡	記載した面積(m ²)	備考
第1次	二口	H4.6.25 ～9.17 (8日間)	富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 伊佐 譲 法 岡 本 順一郎	116,000	1,610	二口五反田	25,600	
						二口	15,940	
第2次	二口	H5.7.21 ～8.10 (10日間)	富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 伊佐 譲 法 島 田 修一	106,400	1,984	二口五反田	24,600	
						橋田	99,000	
第3次	二口	H5.10.21 ～10.28 (4日間)	富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 伊佐 譲 法 島 田 修一	64,000	998	二口五反田	10,450	
						二口油免	53,400	
第4次	安吉	H6.6.6 ～6.23 (12日間)	富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 高 葉 清 志 越 前 康 祐	167,600	1,540	二口	25,300	
						本江宮田 本江大坪	22,900 9,200	
第5次	安吉	H6.10.11 ～11.10 (16日間)	富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 高 葉 清 志 越 前 康 祐 河 前 茂 裕 健 二	166,000	2,060	安吉 本江宮田 本江天水 No.20	99,016 6,254 7,070 2,460	
						本江畑田Ⅰ 本江畑田Ⅱ 本江大坪Ⅰ 本江大坪Ⅱ	16,066 7,116 14,880 3,250	本江大坪遺跡を分離 本江大坪遺跡を分離
第6次	本江	H7.6.7 ～6.13 (4日間)	大門町教育委員会 主事 尾野寺 克 実 富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 越 前 康 祐	46,700	887	本江畑田Ⅰ	6,420	
第7次	本川	H7.10.12 ～11.17 (20日間)	大門町教育委員会 主事 尾野寺 克 実 富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 越 前 康 祐	153,600	4,090	本田宮田 本田畑田 本田天水 安吉Ⅱ	83,633 38,974 No.20遺跡と合併 本川宮田遺跡より分離	
第8次	本田	H8.11.19 ～12.13 (12日間)	大門町教育委員会 主事 尾野寺 克 実	76,500	1,096	本田畑田 本田天水 本田杉田	23,300 28,251 31,200	

第2表 試掘調査年次表

2 調査結果

調査対象地全域で551箇所に試掘トレンチを設定した。表層から遺構検出面までは、全体に浅い。

前述のとおり、年度ごとに急がれる工事予定区域から順に調査を行ったため、結果的に遺跡を分割して調査実施した形になつたが、ここでは遺跡ごとにその概要を記す。

(1) 二口油免遺跡（第3次調査、図版1：A-2、図版2）

層序 基本層序は、1層耕土、2層褐色粘質ローム、3層オリーブ黒色シルト、4層オリーブ灰色・黄色シルト、5層黒色シルト、6層黄灰色シルトとなる。3層は奈良・平安時代の遺物包含層、4層上面は奈良・平安時代の遺構検出面、5層は弥生・古墳時代の遺物包含層、6層上面は弥生・古墳時代の遺構検出面となる。土層の堆積は全般に安定した堆積状況を示したが、幾高地となる遺跡南側では昭和期のは場整備の影響か、削平を受けており、3層を確認できなかつた。また、1・2層に中世の遺物を確認したが遺構は検出できず、は場整備等で消滅したものと思われる。

遺構 土坑、溝状遺構、柱穴と思われる小ピットを検出している。

主に遺跡東半分では弥生後期～古墳時代の遺構、遺物が主となり、特に20・24Iでは弥生中期の遺物も確認していることから、中期の遺構の存在が考えられる。また、遺跡西側では、奈良・平安期の遺構が主となり、6層上面での遺構密度は薄くなる。

遺物 弥生土器、須恵器、土師質土器、珠洲焼、近世陶器、越中瀬戸焼が出土している。

1～IIは弥生上巣である。1～6は甌の口縁部、7は甌もしくは甌の底部、8・9・IIは器台の脚部、10は高杯、もしくは器台の脚部である。そのほとんどは弥生後期に属するが、1・2は中期前葉に属し、1は口縁部外面に、2は口縁部内面に刻みを施す。4は中期に属し、口縁部外面に縦方向にはしハケ調整を施す。8は有段脚である。9は外面に赤彩を施す。

12～17・20は須恵器である。12・13は杯蓋、14は無台杯、15・16は杯の口縁部、17は甌の底部、20は甌の体部である。12は7世紀前半に比定できる。20は外面に11条／3cmの擬格子状叩きを施し、内面の当て具は、同心円と平行線を呈す二つの原体を使用している。18・19は18世紀代の土師質土器の甌である。

21は中世土瓶皿である。口径9.0cmを測る。25～31は珠洲焼である。25～27はすり鉢、28・31は甌、29・30は甌の体部である。25は珠洲IV～V期に属する。28は底面に静止糸切り痕を持つ。29は外面に10条／3cmの、30は13条／3cmの叩き目を持つ。31は13世紀代に属し、9条／3cmの綾状叩き目を持つ。

22・23は近世陶器、24は越中瀬戸焼である。

小結 以上のように、当遺跡は、弥生中期～古墳時代が中心になる箇所と、奈良・平安時代が中心になる箇所と大きく二分できる。その性格は一般集落であると考えていた。その後、平成7年度に他の町事業のため、は場整備範囲外である遺跡南端部で試掘調査を行つたところ、奈良・平安時代の遺構検出面は削平を受けて消失していたが、弥生～古墳時代の遺構、遺物は良好に遺存する事を確認した。そのため、平成8年度より緊急発掘調査を実施中であるが、古墳の周溝部と考えられる、一辺約20mの方形の区画溝を検出している。残念ながら、墳丘部は削平のため消失しているが、周溝部、及び周辺の溝からは弥生末期～古墳中期前半の遺物が出土しており、興味がもたれる。

また、は場整備範囲外西側では、区画整理事業のため、試掘調査をこれも平成8年度に行つた。遺物包含層は確認できなかつたが、奈良・平安時代の遺構検出面は良好に遺存していた。ここまででは弥生～古墳時代の生活圏は及ばないようである。

(2) 二口五反田遺跡（第1次、第2次、第3次調査、図版1：A-2・A-3、図版3）

層序 基本層序は、1層耕土、2層黒褐色粘質ローム、3層灰オリーブ色ロームとなる。3層上面が遺構検出面となるが、弥生後半～古墳時代、奈良・平安時代の遺構が同一面に遺存する。遺物包含層は、遺存していない。

遺構 土坑、溝状遺構、柱穴と思われる小ビットを検出している。51～54T・59～62T周辺がその中心になる。奈良・平安時代が中心であるが、29・30Tで弥生中期の遺物が出土し、また、遺跡西側で弥生～古墳時代の遺構も一部確認している。

遺物 弥生土器、土師質土器、須恵器、珠洲焼、瀬戸焼、越中瀬戸焼、伊万里焼、近世陶器、古鏡が出土している。

32・33は弥生土器である。双方とも弥生中期に属する。32は壺であり、口縁端部外面下端は小波状を呈し、体部に斜位ハケ調整を施す。内面は横位ハケ調整を施す。33は壺、もしくは甕の底部である。外面上縦位ハケ調整を施す。

34・35は古墳時代の壺、もしくは甕と考えられる土師質土器である。

36～54・56・57は須恵器である。36～41は杯蓋である。36は擬宝珠状のつまみをもつ。38・39の口縁端部は断面三角形を呈す。40は口縁端部を内に巻き込む。41は口縁端部を折り曲げる。42～44・47・48は無台杯、45・49～51は有台杯、52～54は杯の口縁部である。56・57は壺である。55・58・59は古代の土師質土器である。55は平安時代の碗である。底面に回転糸切り痕を残す。58・59は9世紀代に属する壺である。58は口縁端部を丸く納め、59は口縁端部を巻き込む。

60・61は手づくねの中世土師皿である。60は体部に指頭圧痕を残す。62は瀬戸焼の小皿である。淡緑色を呈す釉を施す。63～69は珠洲焼である。63～65はすり鉢である。63は15世紀に属し、64は珠洲IV期に属する。66は甕であり外面上に11条／3cmの叩き目を施し、スタンプ文を持つ。珠洲IV期に属する。67～69は甕の体部破片である。外面上に67は10条／3cmの、68は8条／3cmの、11条／3cmの叩き目を持つ。

70は古窓永である。71は17世紀の越中瀬戸焼の皿である。内面に茶褐色を呈す釉を施す。72は18世紀の伊万里焼の碗である。73は近世陶器である。全面に黒褐色の釉を施し、底部に削り出し高台を持つ。

小結 以上のように、当遺跡は奈良・平安時代が主体で、東側が中心地になる東洛遺跡である。遺跡西側に弥生中期や弥生時代後期～古墳時代までの遺構・遺物を確認できるのは、二口油免遺跡からの広がりの端部と考える。中世の遺物は出土しているが、遺構からの出土ではなく、削平により遺構は消滅したと思われる。また、当遺跡から二口遺跡間は万葉の歌人、大伴家持が歌で詠んだ「三島野」の地といわれ、当遺跡との関連性に興味が引かれる。

(3) 二口遺跡（第1次、第4次調査、図版1：A-3・A-4・B-3・B-4、図版4）

層序 基本層序は、1層耕土、2層黒色粘質土、3層青灰色粘質土となる。遺物包含層は遺存せず、3層上面が遺構検出面となる。試掘調査段階ではこの面に縄文時代・中世の2時期の遺構が存在していると思われたが、平成8年度に遺跡を東西に横切る町道本田土合線の抵觸工事に先立つ発掘調査を実施したところ、実は青灰色粘質土層は2枚あり、縄文時代と中世の遺構検出面に分かれることを確認した。これら青灰色粘質土は、時間の経過とともに、酸化してそれぞれ、黄褐色、黄灰色に変化しない限りは全く区別がつかない。そのため、掘削して遺存状況の確認後、すぐに埋め戻す方法をとる試掘調査では区別できなかつたのである。

前述したように、縄文時代の遺構検出面と、中世の遺構検出面は同一レベルで確認できることから、遺跡内は若干の起伏があり、中世の遺構検出面で微高地となる部分は削平を受けているものと考えられる。

遺構 土坑、小ビットが主である。小ビットは中世の柱穴と考えられ、69Tでは柱根を検出している。

遺物 縄文土器、石製品、中世土師皿、珠洲焼が出土している。

74・75・78・79は縄文土器の深鉢である。74・75の外側の地文は条痕である。78・79は底部である。76・77は凝灰岩

製の打製石斧である。76は残存部中で、最大長10.8cm、最大幅7.1cm、最大厚3.4cmを測る。77は最大長20.1cm、最大幅10.1cm、最大厚3.2cmを測る。

80は手づくねの中世土器皿である。81・82は珠洲焼である。81は片口鉢である。珠洲Ⅱ期に属し、口径は25.0cmを測る。82は壺である。V期に属し、口縁部は肥厚する。

小結 以上のように、当遺跡は、縄文時代、中世の集落遺跡である。遺跡北東部では、谷地形を確認し、そこで遺跡範囲は切れる。また、町道の調査時に確認したことであるが、71T付近でも縄文時代後期の谷を確認している。縄文時代の遺跡範囲の中心はこの谷より東側になり、中世の集落の中心地は遺跡北側になると考えられる。

(4) 本江畠田Ⅰ遺跡 (第5次、第6次調査、図版1:B-1・B-2、図版4・5)

層序 基本層序は、1層耕土、2層床上、3層暗黄褐色シルト、4層暗褐色・黒色シルト、5層白黄色・黄褐色シルトとなる。3層上面は古代・中世の遺構検出面である。4層は弥生時代後期の遺物包含層となり、5層上面が弥生時代後期の遺構検出面となる。遺跡は微高地にあるため、3層はほとんど削平を受けており、110T以外では確認できない。また、4層は地点によって削平を受けているが、基本的にはよく残る。

遺構 溝状遺構、土坑、小ピットを検出した。古代・中世の遺構はほとんど遺存していない。115Tでは弥生後期の堅穴住居らしき大土坑を確認している。また、117T～123Tでは中世の遺構が集中している。

遺物 遺物は、114～116Tで集中している。

出土遺物には、弥生土器、緑色凝灰岩、珠洲焼、古鏡がある。

83～106は弥生土器である。全て弥生後期に属する。83・85・86・88・94・95は壺である。86は口縁帯に擬凹線文を施す。84・87・89・90・91・92は甕である。84は口縁帯に1条の凹線を施す。89は口縁帯に擬凹線文を施す。93は広口壺である。96は甕、もしくは甕の底部である。内面に削り調整を施す。97・99・103・105は高杯である。103は脚部下部を穿孔する。102は器台である。口縁帯に擬凹線文を、外表面にミガキ調整を施し、丁寧な作りである。106は鉢である。口縁端部に1条の凹線を施す。107・108は緑色凝灰岩である。115Tの土坑内より粗削りの状態で出土している。107は管玉の未成品である。108は管玉石核である。

109～111は珠洲焼である。109・110はすり鉢である。110は珠洲V～VI期に属する。

112は古窓水である。17世紀初頭～中葉に属する。

小結 以上のように、当遺跡は、すぐ西側に旧和田川を望む弥生時代後期が主となる遺跡である。周辺の地形と比べ、地表面のレベルはほとんど変わらないにも関わらず、地表面のレベルは50cm前後低く、古代・中世面は削平を受けていることが分かる。また、緑色凝灰岩の粗削り状態での出土から、当遺跡は玉を製造していた遺跡であることが分かる。

(5) 本江大坪Ⅰ遺跡 (第4次、第5次調査、図版1:B-2、図版5)

層序 基本層序は、1層耕土、2層灰色粘質土、3層黒色粘質土、4層青灰色・黄灰色粘質土となる。3層は奈良～中世の遺物包含層、4層上面はその遺構検出面である。

遺構 ほとんどのトレレンチで偏りもなく検出できた。小ピットが主であるが、土坑、溝状遺構も検出した。

遺物 弥生土器、須恵器、青磁、珠洲焼、鉄製品が出土している。

113～115は弥生土器である。113は甕である。口縁部外側に削りを施す。114・115は壺、もしくは甕の底部である。

116～119は須恵器である。116は無台杯、117は杯の口縁部、118・119は有台杯の底部である。

120は青磁の碗である。121～125は珠洲焼である。121はすり鉢である。122・123はすり鉢である。122は珠洲V期に

属し、口縁端部に波状文を施す。内面に7条／3cmの鉄目を持つ。124は蓋の体部破片である。珠洲IV期に属し、外面上に8条／3cmの叩き目を持つ。126は馬鎌と考える。最大長21.1cm、最大幅23cm、最大厚1.0cmを測る。

小結 以上のように、当遺跡は、奈良～中世の集落遺跡である。遺跡南北側で、東西方向に延びる谷地形がはしり、これを境に、本江大坪II遺跡と分割した。東は棚山遺跡、西は本江畠田I遺跡とは接する。

(6) 棚田遺跡(第2次調査、図版1：B-2・B-3、図版5)

層序 基本層序は、1層耕土、2層黒色シルト、3層灰黄色シルトとなる。2層が遺物包含層となり、3層上面が遺構検出面となる。遺跡中央周辺は微高地となり、2層は削平を受けている。

遺構 159～165T・170～172Tと、184～186T・197Tの2地点で集中している。前者は、弥生時代末～古墳時代の小ビット、溝状遺構が集中している。特に162Tの抵抗区では土坑墓の可能性のある方形土坑を検出した。後者は、奈良～中世の柱穴状の小ビットと溝状遺構を検出している。

遺物 石製品、弥生土器、土師質土器、須恵器、中世土師皿、珠洲焼、近世陶器、肥前系陶器が出土している。

127は打製石斧である。最大長11.6cm、最大幅9.4cm、最大厚2.7cmを測る。石材は凝灰岩である。

128・129・132～134は弥生土器である。128・129は甕の口縁部である。128は口縁部に擬凹線文を施す。132・133は高杯、134は高杯、もしくは器台の脚部である。132は内面に板状工具による調整を施す。133・134は月影式に属する。

130・131は古墳時代の土師質土器の甕の口縁部である。

135・136は須恵器である。135は杯蓋で、口縁端部は丸くおさめる。136は壺の底部である。

137・138は中世土師皿である。双方とも手づくねで、内外面にタールが付着する。139は珠洲焼のすり鉢の口縁部である。口唇部に波状文を施す。珠洲V期に属する。

140・141は近世陶器の椀である。140の輪は白色を呈す。141の輪は浅黄橙色を呈す。

小結 以上のように、当遺跡は、遺跡北側の弥生末～古墳時代と、遺跡中央から東側の奈良～中世の二つの中心地を持つ。これは、二つの時期の異なる小規模な集落が一つのまとまりを示しているためで、二つの時期の連続性はない。

(7) 安吉遺跡(第5次調査、図版1：A-4・A-5・B-4・B-5、図版6)

層序 基本層序は、1層耕土、2層黒色粘土質土、3層青灰色・灰白色シルトとなる。2層が遺物包含層となり、3層上面が中世の遺構検出面となる。当遺跡は、微高地に立地するため、2層は削平を受け、谷の落ち際以外では、ほとんど残らない。

遺構 遺跡全域で中世の溝状遺構、土坑、柱穴を検出した。ほとんどのトレンドチで密に確認している。

また、東側の本田天水遺跡から南側の安吉II遺跡境までは、谷地形が当遺跡を囲むようにはしる。旧地形は、南から北へ、且つ東から西へ緩やかに高くなる。その中に、小さな谷が幾筋かはしる。

遺物 須恵器、中世土師皿、青磁、珠洲焼、瓦器、越中瀬戸焼、肥前系磁器、伊万里焼、石製品が出土している。

142は須恵器の杯蓋である。口縁端部は丸くおさめる。

143～159は中世土師皿である。145は外面に指頭圧痕を残す。146は内外面に煤が付着する。160・161は青磁の椀である。162～173は珠洲焼である。162～166はすり鉢である。162・163は珠洲IV期に属する。163は内面に11条／3cmの鉄目を持つ。164は珠洲V期に属し、口縁部上面に波状文を施す。内面には8条／3cmの鉄目を持ち、断面には漆が付着している。167・171は甕、もしくは甕であり、168～170・172・173は甕である。体部外面に、167・171・172は7条／3cm、168・169・173は8条／3cm、170は10条／3cmの叩き目を持つ。174は砥石である。両面を使用している。175・176は瓦器である。175は鉢の口縁部、176は風炉である。

177～182は越中瀬戸である。177は天目茶椀、178・179は皿、180は絵袖小皿、181は椀、182はすり鉢である。179の底面はヘラ削りを施し、180・181は回転糸切り痕を残す。183は近世磁器の徳利である。184は伊万里焼の椀である。

小結 以上のように、当遺跡は、15世紀～16世紀が主体である集落遺跡である。遺物は遺跡北側で多く確認し、南側にいくにつれて希薄になる。大門東部地区では珍らしく、中世の遺構が良好に遺存するが、旧地形は他所より若干低いため、削平が遺構面まで及ばなかつたのであろう。

(8) 安吉Ⅱ遺跡 (第5次、第7次調査、図版1：B-4)

安吉遺跡とは、間に谷を挟むだけで、基本層序、立地、遺構の構成、時代等は同一である。第5次調査では、本田宮山遺跡の北側の広がりとして捉えていたが、第7次調査で、本田宮田遺跡との間に空白地ができることと、時代が重ならないことを確認したため、切り離して新たに安吉Ⅱ遺跡としたものである。出土遺物は少なく、図示できるものも無かつたが、中世の遺物が主である。

(9) 本田天水遺跡 (第5次、第7次、第8次調査、図版1：B-5・B-6、図版7)

層序 基本層序は、1層耕土、2層床土、3層黄灰色・黄褐色粘質土、4層青灰色粘質土となる。3層上面が奈良・平安時代遺構検出面となる。昭和期のは場整備等で削平を受けているが、3層以下に及ぶことは少なく、遺構は良好に遺存する。

遺構 遺構は溝状遺構、堅穴住居と思われる土坑、柱穴状小ビットが良好に残る。遺跡西側の安吉遺跡との境では谷地形となる。287～296Tに集中している。

遺物 須恵器、土師質土器、瀬戸美濃焼、越中瀬戸焼、珠洲焼、近世陶器が出土している。

185～188は須恵器である。185・186は有台杯の底部である。187は無台杯の底部である。189・190は古代の土師質土器の甕である。

192は瀬戸美濃焼の絵袖小皿である。193は珠洲焼のすり鉢である。珠洲V期に属し、口唇部に波状文を施す。

191・194は越中瀬戸焼である。191は椀、194は天目茶椀である。195は近世陶器の皿である。内面に重ね焼痕を残す。

小結 以上のように、当遺跡は、奈良・平安時代を中心として、中世にまでその存続年代を広げる集落遺跡である。西に谷地形が南北方向にはしり安吉遺跡との境界になり、東でも大きな谷が存在する。

また、当遺跡南西端(279・280・285T)は、第5次調査の段階でその南側の本田畠田遺跡とつながる可能性が高かつたため、No20遺跡として仮称をつけたが、第7次調査で南側への広がりが確認できず、本田天水遺跡の一部とした。

(10) 本田杉田遺跡 (第8次調査、図版1：B-6、図版7)

層序 基本層序は、1層耕土、2層床土、3層黄灰色・黄褐色粘質土、4層青灰色粘質土となる。3層上面が奈良・平安時代の遺構検出面となるが、遺跡の中央から東側にかけては削平が激しい。

遺構 前述のとおり、削平が激しく、遺構の遺存状況はまばらであるが¹、遺跡西側(300～305T)では、削平をほとんど受けおらず、溝状遺構、堅穴住居と考えられる土坑、柱穴状小ビットが密に遺存する。

遺物 須恵器、土師質土器、珠洲焼、近世陶器が出土している。

196～201は須恵器である。196は杯蓋で、口縁部を丸くおさめる。197は無台杯、198・199は杯の口縁部である。200は長頸壺の口縁部、201は壺の底部である。202～206は土師質土器である。202・203は甕の底部である。204～206は甕の口縁部である。204・206は口縁部を内に巻き込む。

小結 以上のように、当遺跡は、奈良・平安時代を中心とした集落遺跡である。削平が激しく、旧地形の復元は難

しい。また、遺跡内においても遺構・遺物の遺存がない範囲も多いが、部分的に遺存している箇所もあり、試掘トレーニングについても密に設定していないため、敢えて一つの遺跡とした。

(11) 本江畠田Ⅱ遺跡（第5次調査、図版1：B-1・B-2・C-1・C-2、図版7）

層序 基本層序は、1層耕土、2層明灰褐色シルト質ローム、3層極暗褐色シルト質粘土、4層灰白色・黄灰色粘土上、5層黒色粘土となる。3層が中世の遺物包含層、4層上面がその遺構検出面、5層が弥生時代の遺物包含層となる。5層は非常に良好に遺存する。6層以下は当然、弥生時代の遺構検出面が存在するであろうが、50cm以内の掘削制限があつたため、遺構検出面までは届いていない。

遺構 溝状遺構、柱穴状小ピットを検出した。

遺物 弥生時代の遺物包含層は良好に遺存していたが、遺物は中近世以外で図示できるものの出土が無かつた。

207は珠洲焼の壺の口縁部である。珠洲Ⅳ期に属する。

208は唐津焼の皿である。底面に削り出し高台をもつ。

小結 以上のように、当遺跡は、弥生時代・中世の遺跡である。弥生時代についてはその存在を確認したのみである。また、当遺跡北側の、本江畠田Ⅰ遺跡とは間に谷がはるため、二つに分けた。

(12) 本江宮田遺跡（第4次調査、図版1：C-1・C-2、図版7）

層序 基本層序は、1層耕土、2層灰色粘土、3層黒色粘土、4層青灰色・黄灰色粘土となる。3層は中世の遺物包含層、4層上面が遺構検出面となる。

遺構 426Tのみで検出している。

遺物 ほぼ全てのトレンチで出土している。

出土遺物には、弥生土器、土師質土器、須恵器、中世土師皿、珠洲焼、白磁、伊万里焼がある。

210は弥生土器の壺、もしくは壺の底部である。外面にハケ調整を施す。

209・211・212は古墳時代の土師器である。209は壺の底部である。211・212は高杯である。

213・214は須恵器である。213は杯、214は壺である。

215・216は中世土師皿である。216は15世紀に属する。217～219は珠洲焼である。217は壺の口縁部である。218・219はすり鉢である。双方とも珠洲Ⅳ期に属する。220は白磁の皿である。221は伊万里焼の碗である。

小結 以上のように、当遺跡は、弥生時代後期～古墳時代、中世を主とした遺跡である。しかし、調査で確認した範囲は遺跡の切れ目に当たり、北側、東側は谷になり、遺跡範囲は切れる。おそらく、この遺跡の本体は西側の現在の集落部分に重なるのであろう。

(13) 本江大坪Ⅱ遺跡（第5次調査、図版1：C-2・C-3）

第4次調査で本江大坪Ⅱ遺跡として確認したが、第5次調査でその遺跡内に東西にはしる谷の存在を確認したため、本江大坪Ⅰ遺跡と分割した。基本層序は、本江大坪Ⅰ遺跡と同じく、1層耕土、2層灰色粘土上、3層黒色粘土、4層青灰色・黄灰色粘土となる。3層は奈良～中世の遺物包含層、4層上面はその遺構検出面である。

出土遺物は、須恵器、土師質土器があるが、図示できるものは無かつた。

分布調査段階では、その存在を確認できなかつたため、調査対象地から外したが、試掘調査でさらに東に広がることを確認した。当遺跡の遺構検出面は深く、は場整備の弊倒し程度の土工では、未調査部分でも遺構・遺物には影響はなかつたであろう。

(14) 本田宮田遺跡（第7次調査、図版1：B-5・C-3・C-4・C-5、図版8・9）

層序 基本層序は、1層耕土、2層床土、3層黄灰褐色シルト、4層黄灰色・青灰色シルトとなる。基本的に4層上面に弥生時代中期と後期の遺構検出面が遺存する。遺跡西端の一部でしか存在しないが、3層上面にも、弥生時代後期の、こちらは若干4層よりも新しくなるが、遺構検出面が遺存し、4層の遺物包含層となる。また、3層・4層には奈良～中世の遺構が切り込んでおり、かつてはこの上にもう一枚、もしくは2枚の遺構検出面があつたのだと推察する。

遺構 溝状遺構、土坑、小ビットが主であり、竪穴住居と考えられる大土坑も数基検出した。前述のとおり、奈良～中世の本来の遺構検出面は昭和期のは塗整備などにより削平を受けて消滅し、深い遺構が3層・4層に残る。遺存しているものは、柱穴状小ビットばかりである。弥生時代の遺構は、454～497Tまでのかなりの広範囲にわたって、密に遺存する。また、457Tの土坑では、緑色凝灰岩が粗削りの状態でまとめて出土した。貯蔵穴と思われる。

遺物 弥生土器、土師質土器、須恵器、珠洲焼、越中瀬戸焼、近世陶器、石製品が出土している。

222～231・233～239は弥生土器である。222・239は壺である。222はⅢ期に属し、肩部に直線文、斜行単線文、扇形文の櫛描文を施す。233は台付装飾壺である。V期に属する。全体に赤彩を施し、腹部に貼り付け突窓を付す。224・233は高杯である。225は有孔鉢、もしくは壺である。底部に穿孔するが、孔の直径は1.6cmと小さい。226～231は壺である。226・227は弥生後期に属する。228～231は月形式に属する。229・231は口頭部にナデを施し、頭部以下には斜位ハケ調整を施す。234は器台の脚部である。235～237は高杯、もしくは器台の脚部である。238は壺、もしくは壺の底部である。外面にハケ調整を施す。

232は土師質土器の器台である。漆町7～8期に属する。口唇部を面取りし、脚部中位に外側三方から穿孔する。

240・241は須恵器の蓋である。口縁端部は240が折り曲げ、241は丸くおさめる。242は奈良・平安時代の土師質土器の壺である。口縁端部は内に巻き込む。

243は珠洲焼のすり鉢である。珠洲Ⅲ期に属する。

244は近世陶器の碗である。245は越中瀬戸焼の折縁皿で、16世紀末～17世紀初頭のものであろう。

257を除く246～259は緑色凝灰岩製の石核である。257は鉄石英製の石核である。全体的に、石質は光沢がなくやや粗粒である。いずれも土坑の中より一括で出土しており、粗削りした状態で保存されていた。接合関係にあるものは、246～250の5破片、253の2破片、258・259の2破片である。5破片接合内の246と250、247と250、249と250の接合面、及び2破片接合の258と259の接合面には擦り切り痕が認められる。他、253以外の全ての破片で擦り切り痕が認められる。特に、252は上端面の3辺に擦り切り痕を確認できる。

小結 以上のように、当遺跡は、弥生時代中期～古墳時代初頭、奈良～中世の遺跡である。奈良～中世は削平のため遺存状況が悪く、詳細は不明である。弥生時代中期～古墳時代初頭においては、大規模な集落であったと考える。加えて、緑色凝灰岩が粗削りした状態でまとめて出土している。玉の製品は出土していないが、当遺跡も本江畠山I遺跡同様、玉の製造を行っていたのであろう。また、弥生時代後期の遺物に、赤彩土器が出土するなど、一般集落では見られない特徴を有し、周間に墳墓が存在する可能性がある。

(15) 本田畠田遺跡（第7次調査、図版1：B-5・B-6・C-5・C-6、図版10）

層序 1層耕土、2層床土、3層黒色粘質土、4層黄褐色・淡黄灰色シルト、5層黄灰色・青灰色シルトとなる。3層は奈良・平安時代の遺物包含層であるが、遺跡東側の一部に残るのみである。4層上面は遺構検出面となる。この面には、弥生時代中期～後期、奈良・平安時代、中世の3時代の遺構が存在する。また、遺跡西側では、5層の遺物包含層にもなっている。5層上面は弥生時代中期～後期の遺構検出面となる。

遺構 遺跡西側で密に検出できた。3層上面で検出できた遺構の内、弥生時代後期は遺跡西側（502～527T）で多く検出している。奈良・平安時代の遺構は遺跡全域で検出している。中世のものは、遺跡北側（373～375T）のみで検出している。5層上面では、弥生時代後期の遺構が主であるが、中期のものもいくつか検出している。5層上面で遺構を検出できるのは、遺跡西側（502～511T・518～527T）である。遺構には、溝状遺構、昭穴住居と考えられる土坑、柱穴状小ビットがある。

遺物 弥生土器、土師質土器、須恵器、珠洲焼、越中瀬戸焼、伊万里焼、近世陶器が出土している。

260～264・266・268～275は弥生土器である。260・261・263・264・271は壺である。260は口縁部に刻みを施す。体部はハケ調整後ナデ調整を施す。264は外面にハケ調整を施す。262・272～275は壺もしくは甕である。262は頸部で、外面に直線文及び波状文を施す。272～275は底部で、272・275は外面にハケ調整を施す。265～267・269・270は高杯である。266は内外面に、269は内面にハケ調整を施す。268は器台の脚部である。内面にケズリ調整を施す。

また、図示できなかつたが、口縁内部に斜行短線文を施す甕が出土している（写真同版23：326）。

276～285は須恵器である。276～278は杯蓋である。276はTK208に比定できる。277・278は口縁端部を巻き込む。279是有台杯、280は無台杯、281・282は杯である。283は壺の体部破片である。外面に7条／3cmの平行線叩きを施し、内面には同心円当具を当てる。284・285は壺である。286～293は土師質土器の甕である。口縁端部は286は素縁、287・288は折り曲げ、289は上部へつまみ出し、290～292は内に巻き込む。293は外面に5条／3cmの平行線叩き後、カキメ調整を、内面はハケ調整を施す。

294は中世土師皿である。295は越中瀬戸焼の碗、296は青磁の碗、297は珠洲焼のすり鉢である。298・299は越中瀬戸焼の皿で、底面に回転糸切り痕を残す。300は伊万里焼、301は近世陶器である。

小結 以上のように、当遺跡は、弥生時代中期～後期、奈良・平安時代、中世の複合遺跡である。弥生時代の生活圏は、西側で接する本山宮田遺跡の広がりとされる。遺跡北側では削平を受け、遺存しないが、奈良・平安時代は、元は本山宮田遺跡と同一の集落であったのであろう。また、遺構は確認できなかつたが、遺跡北側の床土中に、6世紀前半の須恵器の蓋が出土している。付近では、同年代の遺物が見られず、注目される。

また、前述したように当遺跡と本山宮田遺跡の弥生時代の生活圏は一体のものと考えられるが、奈良・平安時代が顯著に遺存し始める地点をもって、遺跡間の境界とした。

(16) 分布調査（図版II）

「1 2 調査に於ける経緯」で述べたように、試掘調査に入るに当たって、事前に分布調査を実施し、広範囲にわたりて遺物を採集している。

ここでは、その採集した遺物から図示したものをお部紹介しておく。

採集遺物には、石製品、弥生土器、須恵器、土師質土器、瀬戸美濃焼、珠洲焼、越中瀬戸焼、近世陶器がある。

302は打製石斧である。石材は凝灰岩を用い、短筒型である。最大長17.4cm、最大幅8.5cm、最大厚5.0cmを測る。

303は弥生土器の甕、もしくは壺の底部である。

304～311は須恵器である。304は杯蓋で口縁端部は断面三角形を呈する。305は無台杯である。306～308は有台杯である。309は壺の肩部である。310・311は壺の体部である。310は外面に6条／3cmの擬格子状叩きを施し、内面に同心円当具を当てる。311は外面に8条／3cmの平行線叩きを施し、内面に同心円当具を当てる。312は古代の土師質土器の口縁部である。

322は瀬戸美濃焼の皿で、底部に削り出し高台を持つ。313・321・323・324は越中瀬戸焼である。313・321・324は皿、323は灯明受皿である。317は近世陶器のすり鉢の口縁部である。325は石臼である。石材は砂岩である。

III まとめ

以上、計8回にわたる試掘調査の結果、大門町東部地区に所在する15遺跡を確認した。(第5図・第3表)

全体の傾向として、弥生時代後期の遺構・遺物がどの地区でも広範囲に確認できる。また、弥生時代後期の遺構のみならず、中期、あるいは古墳時代前期の遺構も併せて確認できた遺跡が多い。奈良時代以降は、遺物片などの遺跡でも確認できたが、遺構はあまり確認できていない。谷地形であつたり、低湿地帯であつたりしない限り、遺跡の内外に関わらず、東部地区のほとんどで何らかの営みがあつたのであろうが、削平により、遺存している箇所は少ない。また、縄文時代の遺構は、二口遺跡でのみ確認できた。

地形的には、現在の状態では場整備等の削平により明らかではないが、若干のゆるやかな起伏や谷が数条入りながらも、比較的安定した平野部であったのであろう。

「II 1 調査の経過」の段でも述べたが、この試掘調査は祭壇は場整備事業に伴い行った確認調査である。従つて、地元住民からの強い要望もあって、工事によって影響を受けるであろう深さまでの確認しか行っておらず、さらなる地下はまだ不明な箇所が多い。そのため、本書で示した遺跡範囲は必ずしも確定したものではないことを最後に断つておく。

番号	遺跡名	時代	地区	面積(m ²)	備考
1	二口油免	弥(中・後), 古(前), 奈, 平, 中	二口・中村	85,000	古墳周溝有
2	二口五反田	奈, 平, 中, 近	二口・棚田	103,000	
3	二口	縄(晚), 中	棚田・安吉	97,000	
4	本江畠田Ⅰ	弥(後), 古(前), 中, 近	本江・中村	125,000	緑色凝灰岩出土
5	本江大坪Ⅰ	奈, 平, 中	本江・中村	61,000	
6	棚田	縄, 弥(後), 占, 奈, 平, 中, 近	棚田	101,000	
7	安吉	中, 近	安吉	271,000	
8	安吉Ⅱ	中, 近	安吉	26,000	
9	本田大水	奈, 平, 中, 近	本田	38,000	
10	本田杉田	奈, 平	本田	25,000	
11	本江畠田Ⅱ	弥, 中	本江	15,000	
12	本江宮田	弥(後), 古, 奈, 平, 中	本江・開Ⅱ	163,000	
13	本江大坪Ⅱ	奈, 平, 中	本江	46,000	
14	本田宮田	弥(中・後), 古, 奈, 平, 中, 近	本田	206,000	緑色凝灰岩出土
15	本田畠田	弥(中・後), 古, 奈, 平, 中, 近	本田	113,000	

第3表 遺跡総括表 (凡例: 縄文一縄, 弥生一弥, 古墳一古, 奈良一奈, 平安一平, 中世一中, 近世一近)

M.N.



第5図 調査結果 (S=1/10,000)

参考文献

- 池野正男 1986 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」「大境」第11号 富山考古学会
- 池野正男 1987 「射水丘陵における9・10世紀後半の須恵器窯跡」「大境」第12号 富山考古学会
- 池野正男 1990 「射水丘陵における須恵器窯跡について」「大境」第15号 富山考古学会
- 石川県立埋蔵文化財センター 1995 「谷内・杉谷遺跡群」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 「漆町遺跡！」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1989 「金沢市米泉遺跡」
- 金沢市教育委員会 1981 「金沢市中屋遺跡」
- 金沢市教育委員会 1986 「金沢市新保本町チカモリ遺跡－第4次発掘調査兼土器編－」
- 金沢市教育委員会 1996 「西念・南新保遺跡IV」
- 国立歴史民族博物館 1993 「日本出土の貿易陶磁」西日本編2
- 酒井頼洋 1987 「片口村井口遺跡出土の縄文晩期の土器」「大境」第10号 富山考古学会
- 富山市教育委員会 1987 「長岡杉林遺跡－富山県富山市長岡杉林遺跡発掘調査報告書－」
- 富山県教育委員会 1991 「北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編6－境A遺跡土器編」
- 富山県教育委員会 1992 「北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編7－境A遺跡総括編」
- 富山県文化財振興財団 1994 「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）」
- 富山県文化財振興財団 1996 「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）」
- 富山県教育委員会 1982 「北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－」
- 大門町教育委員会 1990 「布目沢北遺跡発掘調査概要」
- 富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1991 「大門町企業団地内遺跡発掘調査報告（1）
－布目沢東遺跡－ －布目沢北遺跡－」
- 富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1992 「大門町企業団地内遺跡発掘調査報告（2）
－布目沢北遺跡第3次調査－」
- 沼田啓太郎 1956 「旧石川郡安原村中屋遺跡調査報告」「右川考古学研究会会誌」第8号 石川考古学研究会
- 能登町教育委員会 1986 「真駒遺跡」
- 野々市町教育委員会 1983 「野々市町御経塚遺跡」
- 婦中町教育委員会 1995 「中名II遺跡発掘調査報告」
- 出崎政子 1969 「北陸地方の縄文時代晩期について」（1）「大境」第3号 富山県考古学会
- 谷内尾吉司 1983 「北加賀における古墳出現期の上器について」「北陸の考古学」
- 吉岡康暢 1971 「石川県下野遺跡の研究」「考古学雑誌」第56巻第4号 日本考古学会
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
- 吉岡康暢 1991 「日本海域の上器・陶磁」 六興出版

層	番号	種	量	目	径	基	高	外	面の特徴	内	の特徴	成	色	調	備考
二回油免	1	陶土器	器		15.0			山腹外底にキザミ、ハケ割れ	不明	良	にぶい蜜黄色	中堅			
	2	陶土器	器		24.0			タテハケ	山腹外底面にキザミ	良	にぶい褐色	中堅			
	3	陶土器	器		6.6			タテハケ	ヨコハケ	良	内腹灰色、外唇に ふく蜜黄色	中堅			
	4	陶土器	器		13.0			ハケハナテ	不明	良	浅黄褐色	中堅			
	5	陶土器	器		16.0			ハケ	ハケ	良	にぶい褐色				
	6	陶土器	器		13.4			ハケ	ハケ	良	にぶい蜜褐色	浅蜜			
	7	陶土器	器		14.2			腹西縁文	不明	良	にぶい蜜褐色	浅蜜(法化期)			
	8	陶土器	器		15.0			ナテ		不良	にぶい蜜褐色				本器の腹部
	9	陶土器	器					ナテ	不明	良	内腹にふく蜜褐色、 外唇に褐色	本器			
	10	陶土器	器					ナテ	不明	良	浅黄褐色				
	11	陶土器	器					ナテ	不明	良	初赤褐色				
	12	陶器	器		12.8					良	青灰褐色	7c前半			
	13	陶器	器					ナテ		良	灰褐色				
	14	陶器	器		10.4	6.0	2.6	ナテ、底面凹板ヘラ切 り脱	ナテ	良	灰白色				
	15	陶器	器		13.0			ナテ	ナテ	良	青灰色				
	16	陶器	器		17.0			ナテ、底面凹板ヨコナ 子	ナテ	良	青灰色				
	17	陶器	器				11.0			良	灰褐色				
	18	上斜面上器	器		13.2			ナテ	不明	良	蜜褐色				
	19	上斜面上器	器		13.3			口縁部にヨコハケ、ナ テ	ナテ	良	にぶい蜜褐色				
	20	陶器	器					口縁部/3cmの腰各子状 突き	同心半平行筋当鼻張	良	灰褐色				
	21	十脚青十器	器		9.0			ナテ	タール付裏	良	蜜褐色				
	22	近井丸器	器		11.0			ナテ	施釉	良	灰白色	蜜調蜜褐色			
	23	近井丸器	器				4.4	ハラクズリ、ケシズリ、 し崩れ、崩壊	施釉	良	灰褐色	蜜調蜜褐色			
	24	近井丸器	器					表面赤切り脱		良	灰白色				灰褐色
	25	丸器	器						ナテ	良	灰褐色	14~15c	N~V		
	26	丸器	器						ナテ	良	灰白色				
	27	丸器	器		11.0			表面赤切	ナテ	良	灰褐色				
	28	丸器	器		11.6			表面赤色をむり張 り、凹凸	ナテ	良	青灰褐色				
	29	丸器	器					凹凸		良	灰褐色				
	30	丸器	器					凹凸/3cmの耳さ	当鼻張	良	灰褐色				
	31	丸器	器					9個/3cmの印書き	当鼻張、腹位ナテ	良	灰褐色				
二回目	32	陶土器	器		16.0			斜位ナテ	斜位ナテ	良	浅蜜褐色	中堅前半	口輪端部破缺		
	33	陶土器	器		7.2			腹位ナテ		良	蜜褐色	中堅			
	34	土器	器		6.8			ナテ	不明	良	蜜褐色				
	35	土器	器		7.0			ナテ	不明	良	蜜褐色				
	36	陶器	器					ナテ	不明	良	青灰褐色	腹位後部つまみ			
	37	陶器	器					ナテ	ナテ	良	内腹灰色、外腹青 褐色				
	38	陶器	器		11.1			ロクロナテ	ロクロナテ	良	青灰褐色	口輪周辺部新月二角 形			
	39	陶器	器		13.4			ロクロナテ	ロクロナテ	良	青灰褐色	口輪周辺部内に巻 き込む			
	40	陶器	器		15.0			ロクロナテ	ロクロナテ	良	青灰褐色	口輪周辺部折り曲 げる			
	41	陶器	器		19.0					良	青灰褐色				
	42	陶器	器		12.6	9.6	2.5	ナテ、底面へきり脱	ナテ	良	青灰褐色				
	43	陶器	器		13.0	8.4	2.8	ロクロナテ、底面ヘラ 切り脱ナテ	ロクロナテ	良	灰白色				
	44	陶器	器		13.1	8.6	3.5	ナテ	ナテ	不良					
	45	陶器	器		15.0	10.6	4.4	ナテ、底面へきり脱、ナ テ	ナテ	不良	灰褐色				
	46	陶器	器				8.0	ロクロナテ、底面ヘラ 切り脱ナテ	ロクロナテ	不良	灰褐色				
	47	陶器	器				6.6	ロクロナテ	ロクロナテ	良	青灰褐色				
	48	陶器	器				7.4	ナテ	ナテ	不良	青灰褐色				

第4表 出土遺物観察表(1)

(単位: cm)

見筋	番号	種別	性質	口徑	底径	厚さ	外の特徴	内方の特徴	焼成	色	調時	照	備考
	49	武家器	有柄杯			9.6	ナテ	ナテ	良	青灰色			
	50	瓢箪器	有柄杯			8.4	ロクロナテ	ロクロナテ	良	青灰色			
	51	瓢箪器	有柄杯			9.8	底面へラ筋り底ナテ	ロクロナテ	良	青灰色			
	52	瓢箪器	杯		11.8		ナテ	ナテ	良	青灰色			
	53	瓢箪器	杯		14.0		ロクロナテ	ロクロナテ	良	青灰色			
	54	瓢箪器	杯		14.0		ロクロナテ、目凹筋	ロクロナテ	良	青灰色			
	55	上部骨上器	碗		13.1	2.8	3.9 底面筋、底面凹り筋		良	浅青褐色	平安		
	56	兜形器	重		19.8		コクロナテ	コクロナテ	良	青灰色			
	57	瓢箪器	亞			9.0	ロクロナテ、底面へラ筋 切口鋸ナテ	ロクロナテ、底面へラ 切口鋸ナテ	良	灰白色			
	58	土師質土器	蓋		21.6			ヨコナテ	良	浅青褐色		口縁内側を丸く削 める	
	59	土師質土器	蓋		32.3		不明	小明	良	黄褐色		口縁端部巻き込む	
	60	土師質土器	蓋		9.0		ナテ、腹面压痕	ナテ	良	浅青褐色			
	61	土師質土器	皿		11.2				良	浅青褐色			
	62	圓筒形火器	腰掛小皿		14.0		施紋	施紋	良	灰白色			
	63	瓦	圓錐		34.0		ナテ	ナテ、側面	良	灰白色	[E]		
	64	瓦	圓錐				ナテ	側面	良	青灰色	[E] (N期)		
	65	瓦	圓錐		24.0		ナテ	ナテ	良	灰白色			
	66	瓦	蓋				目各/3cmの印き、ス タッフ文		良	青灰色	[E] (N期)		
	67	瓦	蓋				目各/3cmの印き		不良	灰白色			
	68	瓦	蓋				目各/3cmの印き		良	灰白色			
	69	瓦	蓋				目各/3cmの印き、ナ ヌ		良	青灰色			
	70	瓦	古質末								[D期]～[守第]		
	71	越中國戸	皿		5.3		ヘラケズリ、割れ出し 高台	高台	良	灰白色	[E]	複調茶褐色	
	72	伊万里	碗		5.4		東村		良	灰白色	[E]		
	73	近江開塚	盾		4.8		割り出し台背、腹角	施紋	良	灰白色			
二四	74	陶質土器	深鉢		23.0			不明	不良	青灰色		にぶい黄褐色	
	75	陶質土器			22.0			不明	不良	青灰色		にぶい黄褐色	
	76	陶質土器			6.0			不明	小劣	青灰色		にぶい黄褐色	
	77	陶質土器			10.0			不明	不良	青灰色		にぶい黄褐色	
	78	土師質土器	皿		15.0				良	灰白色			
	79	瓦	片口鋸		25.6				良	青灰色		[E]第1年 (昌黎)	
	80	瓦	鏡		35.0				良	青灰色		[E]前半 (V期)	
本江瀬田 一	83	御生土器	蓋		11.0		ナテ	不明	良	青灰色		後期	
	84	御生土器	蓋		14.0		1条の凹槽、ハケ	小劣	不良	にぶい黃褐色		後期	
	85	御生土器	蓋		11.0		ナテ、ハケ	不明	良	浅青褐色			
	86	赤土器	蓋		14.8		腹面凹窓、ナテ	不明	不良	赤褐色		後期	
	87	御生土器	蓋		16.0		小明	不明	不良	赤褐色		後期	
	88	御生土器	蓋		15.8		ナテハニミガキ	小劣	不良	にぶい褐色		後期	
	89	御生土器	蓋		17.0		腹面凹窓、スリット着	不明	良	灰白色		後期	
	90	御生土器	蓋		20.0				良	灰白色			
	91	御生土器	蓋		20.0			不明	良	にぶい黃褐色			
	92	御生土器	蓋		20.0		ハケ	不明	良	にぶい黃褐色		後期(法私)式 行	
	93	御生土器	蓋		16.9		不明	ナテ	良	橙色			
	94	御生土器	蓋		11.0		不明	不明	良	赤褐色		後期(法私式) 行	
	95	御生土器	蓋		13.4								
	96	御生土器	蓋		5.0		不明	ケズラ	不良	内面黒褐色、外面 にぶい褐色			
	97	御生土器	高杯		19.0		不明	ハケ	良	灰白色			
	98	御生土器	高杯	器台	22.0		不明	不明	良	灰白色			
	99	御生土器	高杯		22.0		スス付着	不明	良	淡青褐色		後期	
	100	御生土器			24.0		不明	小明	不良	赤褐色			
	101	御生土器	高杯	器台	24.0		ハケ巻ミガキ		小良	にぶい褐色			
	102	御生土器	高杯		23.6		腹面凹窓、ミガキ	ミガキ	良	橙色		後期(法私式) 行	
	103	御生土器	高杯				ハケナテ、厚子	ハケナテ	良	にぶい黃褐色			
	104	御生土器	高杯	器台	14.2		不明	小明	良	浅青褐色			

第5表 出土遺物觀察表 (2)

(単位: cm)

遺物	番号	種類	基盤	口径	実高	表面	外観の特徴	内面の特徴	施成	色調	考察
	105	茶生土器	高杯		15.2		ミガキ	不規	不良	赤灰白色、外唇浅黄色	
	106	茶生土器	錫		18.8		山腹縦部に1束の巴底文	ナテ	不良	河原褐色、外唇に 上・下・褐色	
	109	茶生土器	笠				表底文、直筋文	ナテ	良	にぶい黄褐色	
	110	鳥頭	網目		15.4		ナテ	ナテ、錫部	不良	青灰色	
	111	鳥頭	更				18cm/3cmの平行引き	ナテ	不良	灰褐色	
奈江人跡	112	古墳	古墳木								11cm~中空
	113	茶生土器	笠		18.8		側底文	不規	良	にぶい黄褐色	
	114	茶生土器	印加文		7.0		ハケ	八角	良	にぶい黄褐色	
	115	茶生土器	底加文		6.4		ハケ	不規	不良	内面青褐色、外唇 にぶい黄褐色	
	116	輪形器	無台座	12.0	8.0	2.6	ナテ	ナテ	良	青灰色	
	117	輪形器	杯		15.6		ナテ	ナテ	良	青灰色	
	118	輪形器	杯		5.3		ナテ	ナテ	不良	青褐色	
	119	輪形器	石台座		7.0		ナテ、底部へ切り落	ナテ	良	青灰色	
	120	音響	錫		14.4				良	紺土灰白色	
	121	鳥頭	底鉢					錫口	良	灰褐色	
	122	鳥頭	底鉢		25.0		ナテ	7.8cm/3cmの削目	良	青灰色	[5世紀(V期)] 内斜形上面に波状 文
	123	鳥頭	舟				ナテ		良	青灰色	
	124	鳥頭	舟		31.5		18cm/3cmの引き	当底面	良	青灰色	14~(V期)
	125	輪溝	底鉢				18cm/3cmの引き	素面	良	青灰色	
	126	鉄鋸歯	馬頭								最大長21.5、最 大幅20.5、最大厚 1.0
櫛田	128	茶生土器	更		11.2		側底文	ナテ	不良	にぶい黄褐色	後期
	129	茶生土器	錫		12.5		ヨコナテ	ヨコナテ	不良	内面にぶい黄褐色 外唇紫色	後期
	130	土師貝口器	蓋		16.2		ヨコナテ	ヨコナテ	良		
	131	土師貝口器	更		16.7		不規	八角	良	浅黄色	
	132	茶生土器	舟形				ナテ	板状工具による調整	良	浅黄色	
	133	茶生土器	高杯				タチニガキヨコナテ	ナテ	不良	浅黄色	月割式並行
	134	茶生土器	英ノ原縁台		13.1		タチニガキヨコナテ	ケズリ・ヨコナテ	良	墨褐色	月割式並行
	135	須彌器	舟形		16.5		ナテ	ナテ	良	灰褐色	[5世紀(V期)] 口縁部分を丸く削 める
	136	須彌器	舟			12.5	ナテ	ナテ	良	青灰色	
	137	土師貝口器	錫		9.2	2.5	タール付巻、ヨコナテ、タール付巻、ヨコナテ	タール付巻、ヨコナテ	良	にぶい黄褐色	
	138	土師貝口器	皿		8.8		タール付巻	タール付巻	良	青褐色	
	139	碗	底鉢		35.4		ナテ	7.8cm/3cmの削目	良	灰白色	[5世紀(V期)] 内斜形上面に波状 文
	140	近世陶器	塊		11.2	3.8	3.9	點彩	良	内面にぶい黄褐色 外唇白色	
安古	141	近世陶器	塊		12.0		點彩	底端	良	浅黄色	
	142	近世陶器	朴器		11.0		ナテ	ナテ	良	青灰色	[5世紀]底端き込み
	143	土師貝口器	皿		8.0		ナテ、タール付巻	ナテ、タール付巻	良	乳灰褐色	
	144	土師貝口器	皿		8.0				良	浅黄色	
	145	土師貝口器	皿		8.0	1.7	側面焼結	不規	良	青褐色	
	146	土師貝口器	皿		8.0	1.9	スス付巻	スス付巻	良	乳灰褐色	
	147	土師貝口器	皿		9.0				良	乳灰褐色	
	148	土師貝口器	皿		8.6				良	乳白色	
	149	土師貝口器	皿		9.0				良	乳白色	
	150	土師貝口器	皿		9.0				良	乳白色	
	151	土師貝口器	皿		10.0	1.7			良	浅黄色	
	152	土師貝口器	皿		10.0		ナテ	ナテ	良	灰白色	
	153	土師貝口器	皿		10.0				良	にぶい灰褐色	
	154	土師貝口器	皿		10.0				良	乳灰褐色	
	155	土師貝口器	皿		10.8		ナテ	ナテ	良	浅黄色	
	156	土師貝口器	皿		11.0		ナテ	ナテ	良	乳白色	
	157	土師貝口器	皿		11.0		ナテ	ナテ	良	乳白色	
	158	土師貝口器	皿		12.0				良	浅灰褐色	

第6表 出土遺物観察表(3)

(単位: cm)

地 諦	番 号	深 度	層 級	口 径	底 径	標 高	外 周 の 特 徴	内 壁 の 特 徴	質 地	燒 成	色 調	時 期	備 考
	159 土塗瓦上器			直	12.0			ハケ	良	黄褐色			
	160 青磁			直	15.0				良	深褐色	14c(後半)~15c(前半)		
	161 青磁			直		4.8			良	淡褐色	15c		
	162 青磁			直	27.0		ナテ	ナテ	不良	灰色	14c(後期)		
	163 青磁			直	30.0		ナテ	ナテ, 1.5cm/3cmの筋目	不良	灰色	14c(後期)		
	164 青磁			直	32.0		ナテ	ナテ, 8mm/3cmの筋目	良	灰色	15c(前期)	口縁上部に波状文、断面に浮き出る	
	165 青磁			直	11.0				良	灰白色			
	166 青磁			直	16.0		ナテ	ナテ	不良	灰色			
	167 青磁			直	11.4		7mm/3cmの平行引き		不良	灰色			
	168 青磁			直	32.0		1.5mm/3cmの平行引き	口縁張三回より3cm下にハケメ	良	灰白色	14c(後期)	口縁部はくび字に外反	
	169 青磁			直			8mm/3cmの平行引き		不良	灰白色			
	170 青磁			直			10mm/3cmの平行引き		良	灰色			
	171 青磁			直			7mm/3cmの平行引き		良	灰色			
	172 青磁			直			7mm/3cmの平行引き		良	灰色			
	173 青磁			直			5mm/3cmの平行引き		不良	灰白色			
	174 石製												
	175 灰陶			直	24.0				良	灰色			
	176 灰陶			直	26.2				不良	黑色	15c		
	177 通中窓戸			直	12.0		直縁	直縁	良	灰白色			
	178 通中窓戸			直		5.0	直縁	直縁	良	にじむ褐色	17c	釉調茶褐色	
	179 通中窓戸			直		4.0	ヘラケズリ、直縁	直縁	良	褐色	17c	釉調茶褐色	
	180 通中窓戸			直	8.0	4.0	1.7 通窓あさり直、直縁	直縁	良	反白色	15c	釉調茶褐色	
	181 通中窓戸			直		6.0	直縁あさり直、直縁	直縁	良	反白色	15c	釉調茶褐色	
	182 通中窓戸			直	24.0		直縁	直縁	良	褐色			
	183 便所系陶器			直			直縁	直縁	良	白色	17c		
	184 伊豆牛			直	3.8		直縁	直縁	不良	灰色	17c~18c		
本町水	185 四方壺			合	8.8				良	灰白色			
	186 便所器			合	10.5		直縁へら切り直		良	灰色			
	187 便所器			合	8.0				良	青灰色	18c		
	188 便所器			直			6mm/3cmの押き	更心川当昌痕	良	灰白色			
	189 上漆瓦上器			直	21.0				良	にじむ黄褐色		口縁裏部を丸く削める	
	190 土塗瓦上器			直		7.5			良	浅褐色			
	191 極小鉢			直		12.0	直縁	直縁	良	灰白色		釉調茶褐色	
	192 斧形尖頭			直	11.5		直縁	直縁	良	灰白色	15c(後半)	釉調茶褐色	
	193 鉢			直		38.0			良	青灰色	15c(後期)	口縁裏部に波状文	
	194 通中窓戸			天	5.0				良	灰白色			
	195 便所系陶器			直		4.5	直縁	直縁	良	灰色		釉調茶褐色	
木田形田	196 便所器			折	15.4	6.8			良	青灰色		口縁部を内側に巻き込む	
	197 黒色器			無	11.5	8.0	3.4		良	青灰色			
	198 黒色器			折	13.0				良	青灰色			
	199 黒色器			折	14.0				良	灰色			
	200 四方壺			直	16.0				良	青灰色			
	201 土塗瓦			直	7.8				良	灰白色			
	202 土塗瓦			直	5.0				不良	浅褐色			
	203 上漆瓦上器			直		6.2			良	浅褐色			
	204 上漆瓦上器			直		24.2			良	浅褐色		口縁裏部を内側に巻き込む	
	205 十脚貯土器			直	24.0		ナテ		不良	浅褐色			
	206 土塗瓦上器			直		33.0			良	にじむ黄褐色		口縁裏部を内側に巻き込む	
本町形田	207 青磁			直		39.0			良	浅色	15c(後期)		
	208 青磁			直		4.8	粗り出し台		良	にじむ黄褐色	15c(後半)~16c(初期)		
本江吉田	209 上漆瓦上器			直						内向黄褐色、背面			
	210 青生土器			直		4.6	ハケ		良	灰白色			
	211 土塗瓦上器			直	16.5				良	浅褐色			
	212 上漆瓦上器			直		7.8			不良	褐色			

第7表 出土遺物観察表(4)

(単位: cm)

遺跡	番号	種類	断面	口径	直徑	器高	外観の特徴	六角の骨盤	焼成	色調	時期	備考
	213	須恵器	杯		16.0				不良	灰白色		
	214	須恵器	盃		18.0				良	黒褐色	14c (N期)	
	215	土師質土器	盃		7.4		1.7	ナテ	ナテ	良	灰白色	
	216	土師質土器	盃		11.2		1.4	ナテ	ナテ	良	青灰色	15c
	217	瓦陶	盃					ナテ	ナテ	良	青灰色	
	218	瓦陶	盃		49.0			ナテ	ナテ	良	灰白色	14c (N期)
	219	瓦陶	盃		31.9			ナテ	ナテ	良	青灰色	14c (N期)
	220	瓦陶	盃			2.8				良	白色	15c
	221	伊万里	瓶			5.4				良	灰白色	17c~18c
本町古窯	222	須恵土器	盃		16.0	5.8	18.0	脚部1半(既溶)に直腹文、斜行傾線文、直腹文		良	灰褐色	直腹(中腹中集)
	223	須恵土器	合付鉢皿		5.0	10.6	19.4	多様な色彩、腹部に墨り付け文字		良	灰白色	V期(後期)
	224	須恵土器	盃		20.0					良	にぶい青褐色	既溶
	225	須恵土器	舟形or直			14		底部字札、底径2.8cm	/ナテ	良	浅褐色	既溶
	226	須恵土器	盃			14.0				良	灰褐色	既溶
	227	須恵土器	盃			16.0				良	灰白色	既溶
	228	須恵土器	盃			15.0				良	月影	
	229	須恵土器	盃			13.0		「直腹ナテ、腰凹底下に斜文のハケ」		良	灰白色	月影
	230	須恵土器	盃			14.0				良	にぶい黄褐色	月影
	231	須恵土器	盃			18.0		口部落ナテ、腰底ハケ		良	灰白色	月影
	232	土師質土器	蓋付		9.6	12.0	18.0	口部落ナテ、腰部中央に当輪からの二方穿孔	/ナテ	良	灰褐色	白社古窯カルビ
	233	須恵土器	盃							不良	灰白色	
	234	須恵土器	蓋台							良	内青茶褐色、外銀暈	
	235	須恵土器	直井等の短湯							良	乳白色	
	236	須恵土器	直井or直合							良	青褐色	須恵直井~古焼焼 期
	237	須恵土器	蓋白or高軒等の唇			11.2				不良	内青褐色、外銀暈	
	238	須恵土器	蓋or直井等の唇			7.9		/ナテ		良	淡黄色	
	239	須恵土器	盃			7.9				良	灰白色	
	240	須恵器	杯蓋		12.0					良	青灰色	口縁端部を折り曲 げ
	241	須恵器	杯蓋		13.6			ナテ	ナテ	良	灰白色	口縁端部を丸く削 める
	242	土師質土器	蓋			17.0				良		上縁端部を内側に 巻き込む
	243	須恵器	蓋			30.0				良	青灰色	13c後半(三財)
	244	須恵不織器	瓶			12.0				良	灰褐色	
	245	須恵器	封財			17.0				良	系褐色	14c~15c初 期(横浜地区)
本町古窯	260	須恵土器	盃			16.4		口部落ナテミ、ハケ後 ナテ		良	内青茶褐色、外銀暈 褐色	中間前半
	261	須恵土器	盃			16.0		/ナテ		良	にぶい褐色	中間
	262	須恵土器	直井等					直腹文、波状文		良	乳白色	中間
	263	須恵土器	盃			15.0				良	乳白色	
	264	須恵土器	盃			16.8		/ナテ		良	にぶい黄褐色	
	265	土師質土器	蓋			16.0				良	褐色	
	266	須恵土器	蓋			24.5		/ナテ	/ナテ	良	淡黄色	
	267	土師質土器	蓋							良	褐色	
	268	須恵土器	蓋台							ナテ	内青茶褐色、外銀暈 褐色	後期
	269	須恵土器	蓋			12.0		/ナテ		良	乳白色	
	270	須恵土器	蓋			13.0				良	にぶい褐色	
	271	須恵土器	蓋			12.0				良	にぶい青褐色	中間
	272	須恵土器	蓋			8.0		/ナテ		不良	青褐色	
	273	須恵土器	蓋			5.0				良	乳白色	
	274	須恵土器	蓋									
	275	須恵土器	蓋			8.0		/ナテ		不良	明褐色	

第8表 出土遺物観察表（5）

(単位: cm)

造 形	序 号	種 别	基 棚	口 宽	底 宽	高 度	外 表 の 特 徴	内 表 の 特 徴	形 状	色 調	時 期	備 考
276	直筒器	杆蓋		13.0					良	灰色	TK26	
277	直筒器	杆蓋		13.0					不良	灰色		口縁端部を内側に巻き込む
278	直筒器	杆蓋		13.0					良	灰色		口縁端部を内側に巻き込む
279	直筒器	無合併		7.6					良	青灰色		
280	直筒器	無合併		12.8			ナテ、腹面へク切り後 ナテ		良	青灰色		
281	上部擴上器	杯		12.0					良	褐色		
282	直筒器	杯		13.0			ナテ	ナテ	良	青灰色		
283	直筒器	直					7枚/3cmの用ひ	馬蹄円当貝銀	良	青灰色		
284	直筒器	直		16.0					良	暗灰色		
285	直筒器	直					ナテ	ナテ	良	青灰色		
286	土師質土器	直		21.0			ハケ		良	深黄色		
287	上部擴上器	蓋		26.0					良	に赤い黄褐色		口縁端部を外側に 引き出る
288	土師質土器	長脚束					ナテ		良	深青白色		口縁端部を内側に 引き出る
289	上部擴上器	蓋					ロクロナテ		良	乳白色		
290	土師質土器	直		20.0					良	に赤い黄褐色		
291	土師質土器	直							良	明褐色		口縁端部を内側に 巻き込む
292	土師質土器	直		32.0					良	に赤い黄褐色		口縁端部をつまみ 上げる
293	上部擴上器	長脚束					5枚/3cmの用ひ、カキ 付	当其折、ハケ	良	に赤い褐色		
294	土師質土器	直		12.0					良	褐色	15c	
295	葦中漬戸	板		9.0			織紋	四輪	良	灰白色		織網赤褐色
296	直筒器	板		14.0					良			
297	舟形	網目		9.0			ケズリ	御日	良	灰褐色		
298	葦中漬戸	直		4.0			片端赤切り板		良	灰白色		
299	葦中漬戸	直		5.2			片端赤切り板		良	灰白色		
300	手巾型	直		12.0					良			
301	近江陶器	直		11.2	5.9	2.6		印花文	良			
326	赤土器	直						仁跡形に斜行短縦文	良	灰褐色	中期	
分類未詳	303	赤土器	豊		6.0				不良	に赤い褐色	中期	
304	直筒器	杆蓋		12.8			ナテ	ナテ	良	青褐色	9c	小さく尖り気味に 下方に伸びる
305	直筒器	無合併		12.8	3.8	3.6	ナテ、腹面へク切り後 ナテ	ナテ	良	青灰色		
306	直筒器	荷台形			8.0		ナテ、巻り出し台面	ナテ	良	青灰色		
307	直筒器	有合併			6.7		ナテ	ナテ	良	青灰色		
308	直筒器	有合併			9.0		ナテ	ナテ	良	青灰色		
309	直筒器	直					ナテ	ナテ	良	灰褐色		
310	直筒器	直					6枚/3cmの格子状叩き	馬蹄円当貝銀	良	青灰色		
311	直筒器	直					6枚/3cmの叩き	馬蹄円当貝銀	良	灰褐色		
312	土師質土器	直		10.0					良	浅青褐色		
313	葦中漬戸	直			3.8					に赤い黄褐色	17c	
314	舟形	網目		28.0			ナテ	ナテ	良	青灰色	17c (N期)	
315	舟形	網目		29.0			ナテ	ナテ	良	灰褐色	17c (N期)	
316	舟形	網目			14.0		ナテ	ナテ	良	青灰色		
317	近江陶器	網目		27.0			織紋	施釉	良	灰褐色		施釉茶褐色
318	直筒器	直			16.6		6枚/3cmの叩き	ナテ	良	灰褐色		
319	舟形	豊or直					11枚/3cmの叩き	当其折	良	灰褐色		
320	舟形	豊or直					13枚/3cmの叩き	当其折	良	灰褐色		
321	葦中漬戸	直		10.4	4.2	2.5	ロクロナテ、麻飾	ロクロナテ、麻飾	良	に赤い黄褐色	17c	施釉茶褐色
322	近江陶器	直			8.0		豆り点し施台、施物	施物	良	灰褐色		施釉茶褐色
323	舟形	網目			10.0		施物	施物	良	灰褐色		施釉茶褐色
324	葦中漬戸	直			6.0		織紋	印花文、施物	良	灰褐色	17c~17c前	施釉茶褐色
325	石製品	石臼										

第9表 出土遺物観察表(6)

(単位: cm)

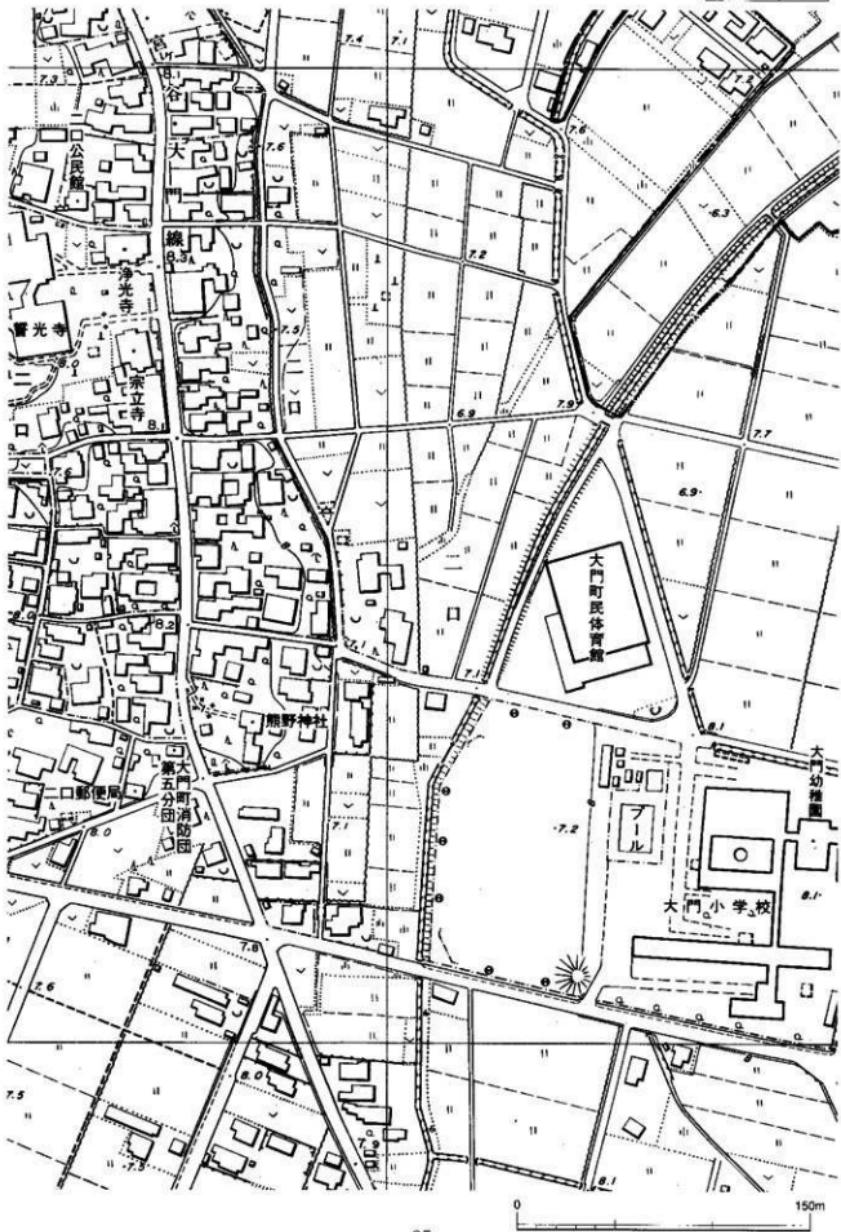
品種	番号	形	幅	最大長	最大幅	最大厚	況	石	材	備考
一	76	打削石斧		19.8	7.1	3.4	397.4	褐色灰岩		元渦火器
	77	打削石斧		20.1	10.1	3.2	798.0	褐色灰岩		
本江原田 1	107	石核					5.4	褐色變灰岩		
	108	石核					17.0	褐色變灰岩		
細角	127	打削石斧		11.6	9.4	2.7	278.4	褐色灰岩		
牛首宮田	246	石核					23.4	褐色變灰岩	塊々切り面有り、247、248、249と接合	
	247	石核					138.4	褐色變灰岩	塊々切り面有り、褐色のものと並むる塊有り、246、248、249と接合	
	248	石核					132.4	褐色變灰岩	246、247、248、249と接合	
	249	石核					161.2	褐色變灰岩	塊々切り面有り、246、247、248、249と接合	
	250	石核					310.4	褐色變灰岩	塊々切り面有り、246、247、248と接合	
	251	石核					11.4	褐色變灰岩	246と切り面有り	
	252	石核					11.2	褐色變灰岩	246と切り面有り	
	253	石核					23.6	褐色變灰岩	246と接合	
	254	石核					19.8	褐色變灰岩	塊々切り面有り	
	255	石核					28.6	褐色變灰岩	246と切り面有り	
	256	小核					6.4	褐色變灰岩	塊々切り面有り	
	257	石核					29.0	褐色灰岩	246と切り面有り	
	258	石核					29.2	褐色變灰岩	塊々切り面有り、246と接合	
	259	石核					29.2	褐色變灰岩	塊々切り面有り、246と接合	
分類表記	302	打削石斧		17.4	8.5	5.0	820.0	褐色灰岩		

第10表 出土遺物観察表 (7)

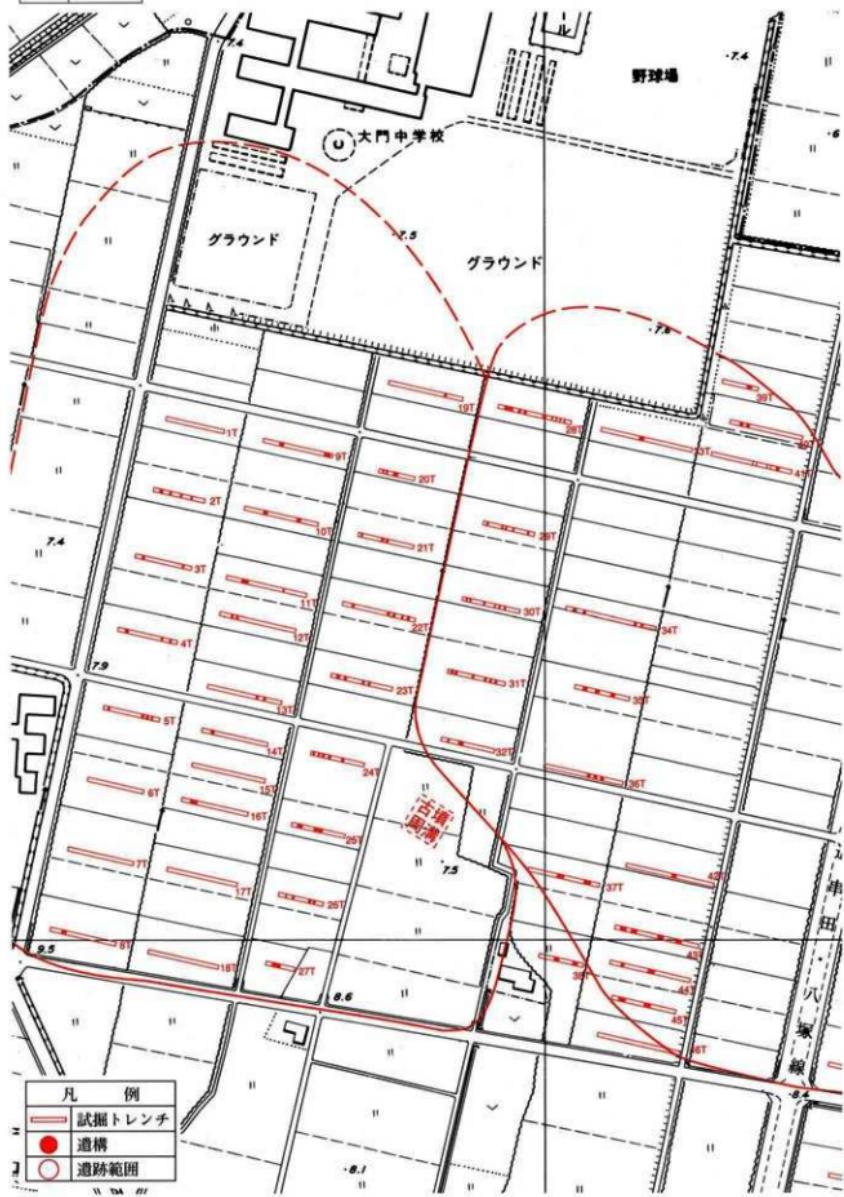
M.N.



A-1	A-2
B-1	B-2



A-1	A-2
B-1	B-2



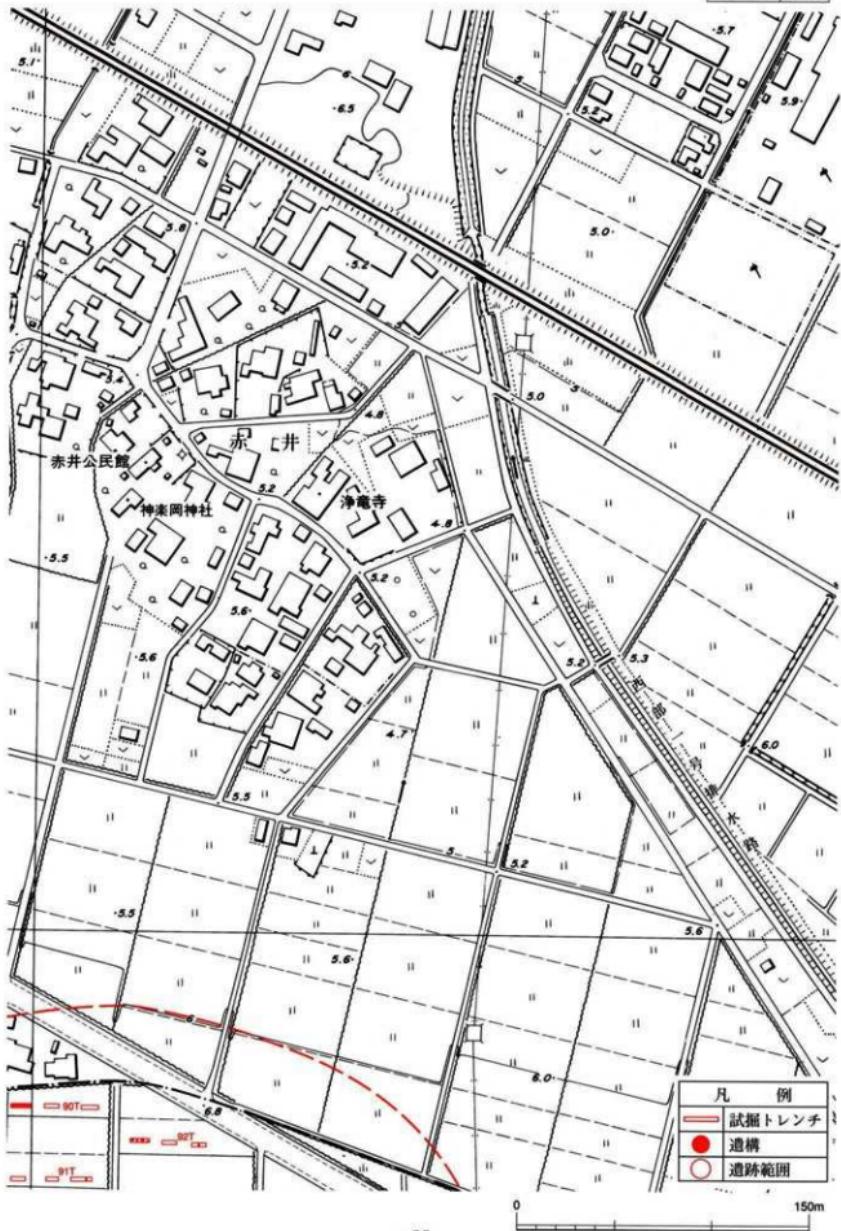
A-3	A-4
B-3	B-4



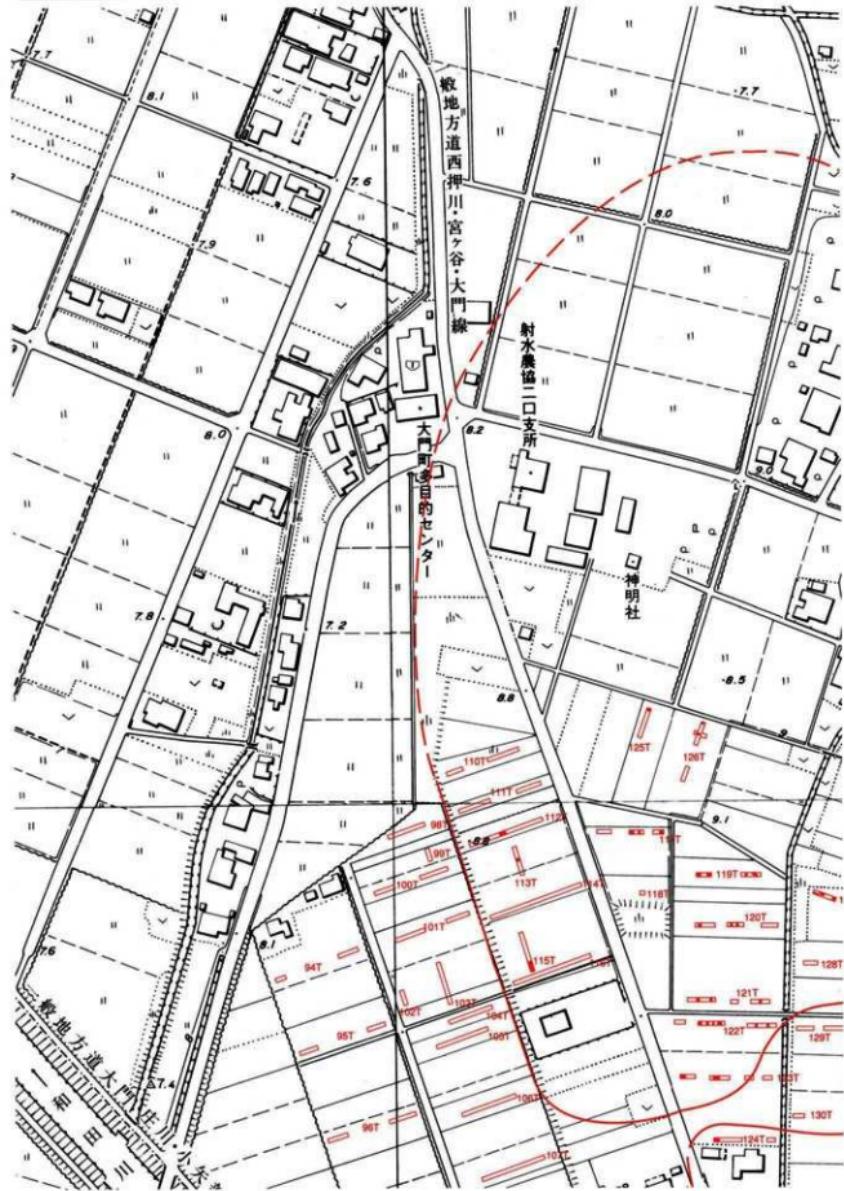
A-3	A-4
B-3	B-4



A-5	
B-5	B-6



A-1
B-1
C-1



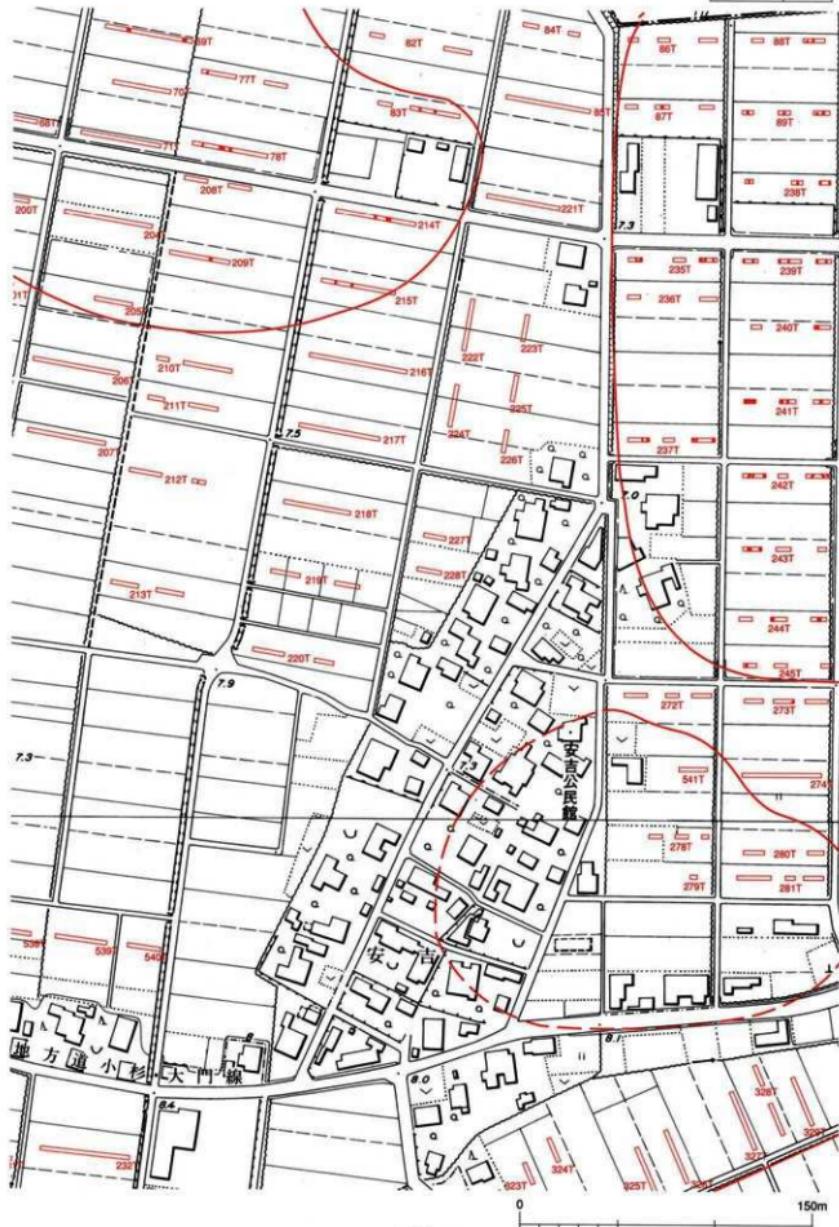
A-2	A-3
B-2	B-3
C-2	C-3



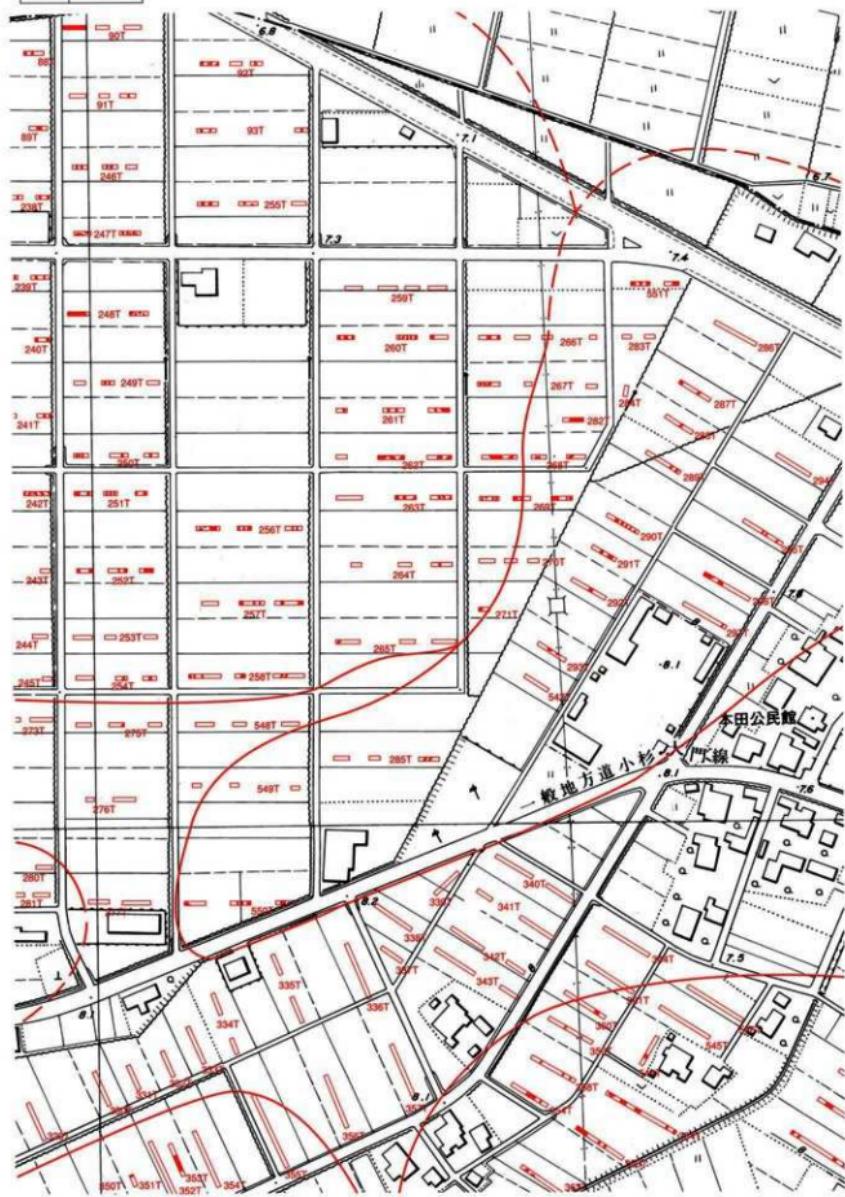
A-2	A-3
B-2	B-3
C-2	C-3



A-4	A-5
B-4	B-5
C-4	C-5



A-4	A-5
B-4	B-5
C-4	C-5



B-6

C-6



B-1

C-1



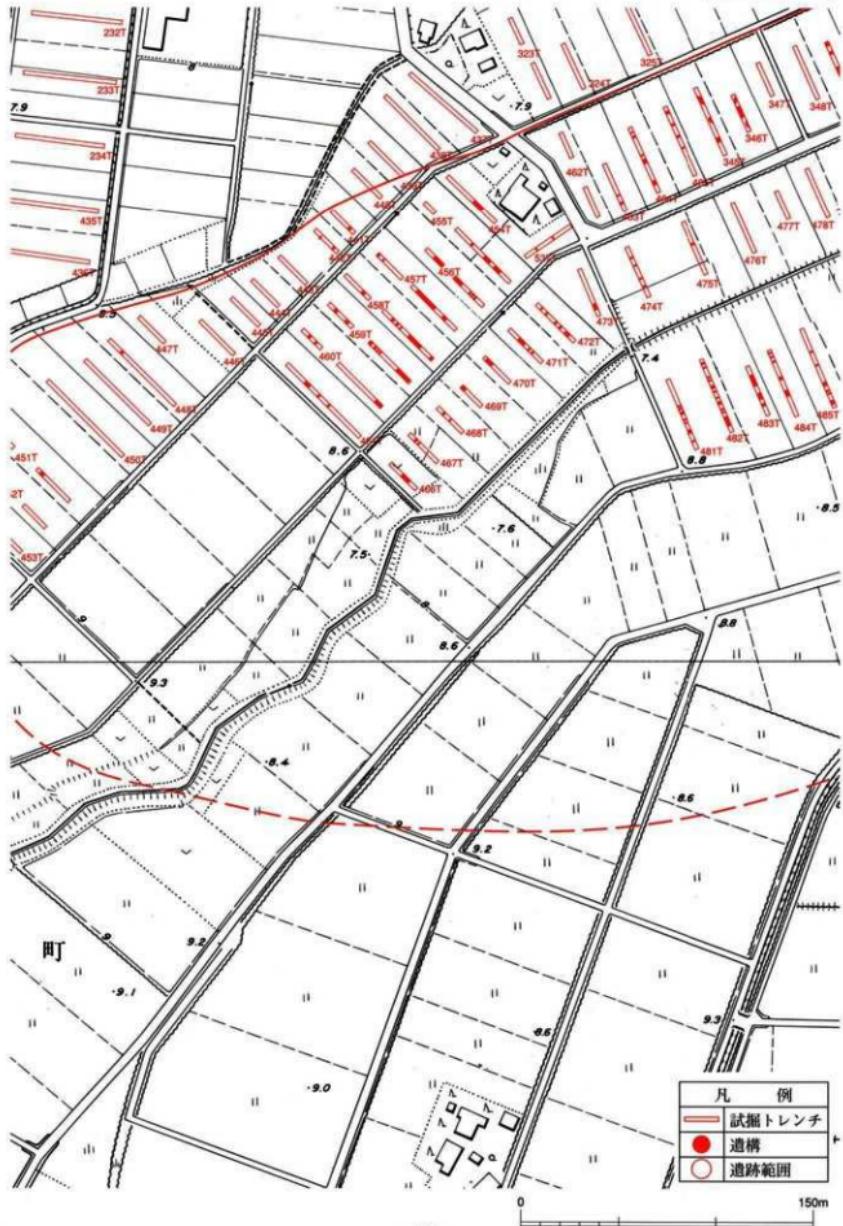
B-2	B-3
C-2	C-3



B-2	B-3
C-2	C-3



B-4	B-5
C-4	C-5

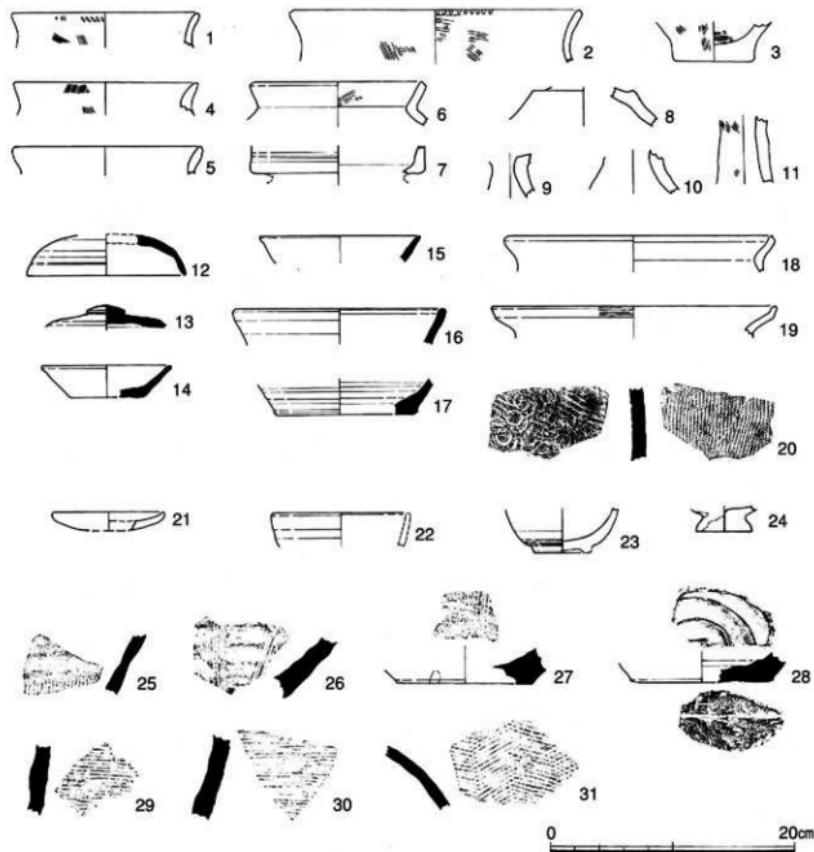


B-4	B-5
C-4	C-5

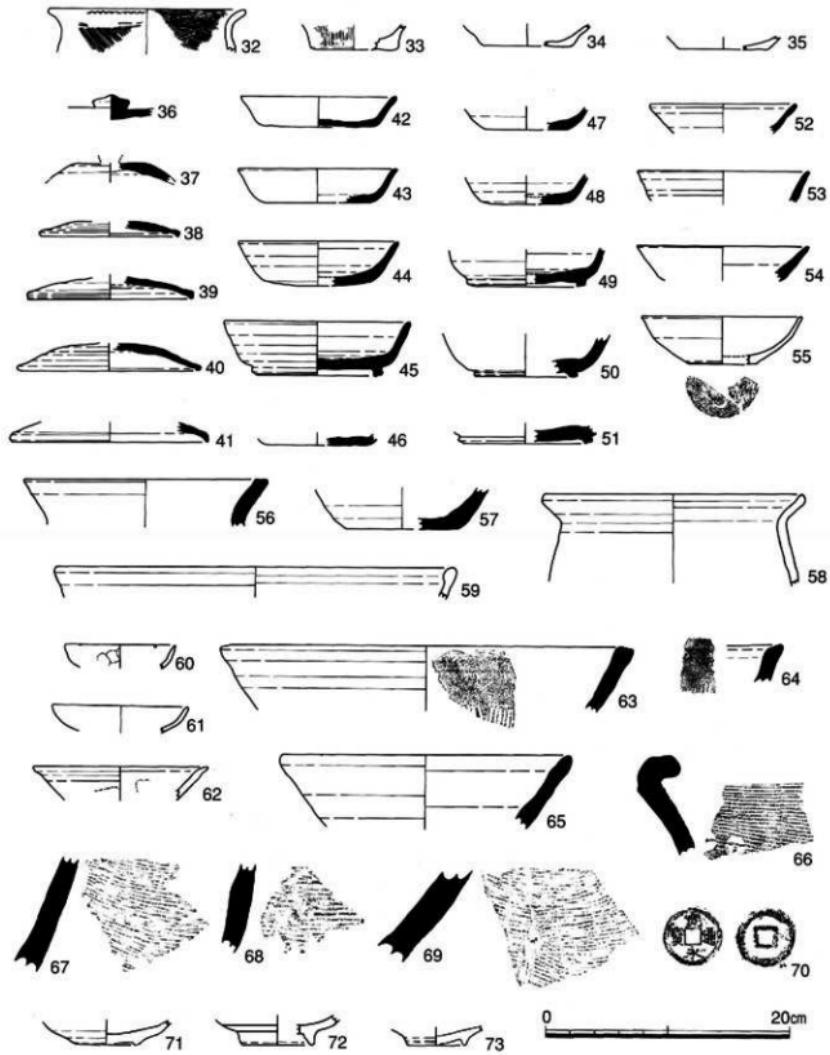


B-6	
C-6	



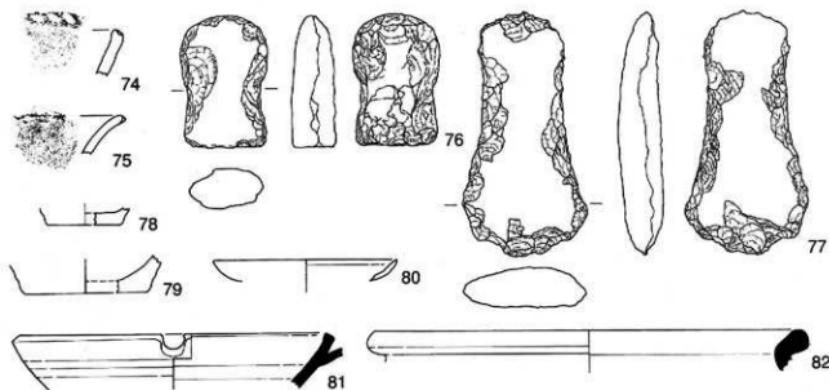


図版2 二口油免遺跡出土遺物実測図

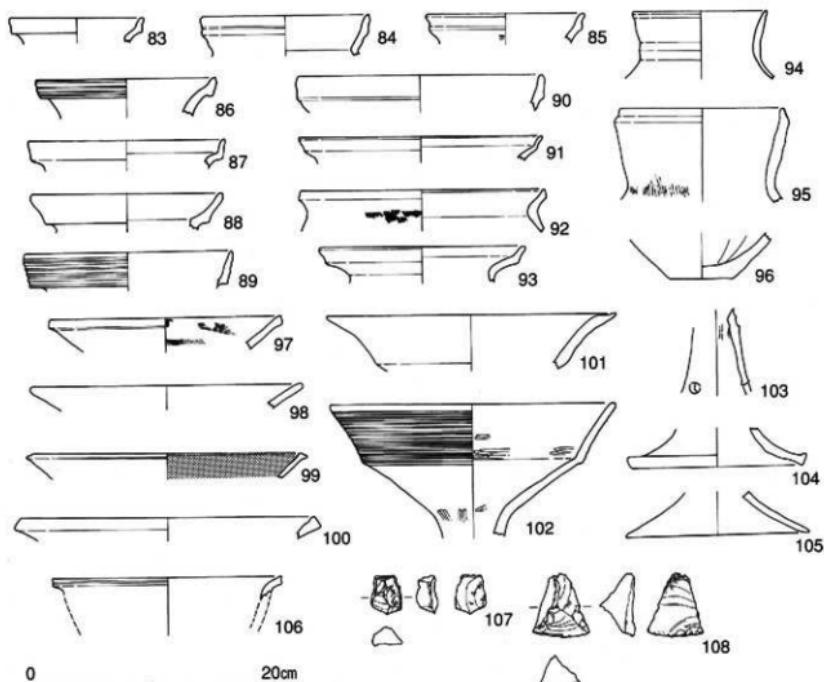


図版3 二口五反田遺跡出土遺物実測図

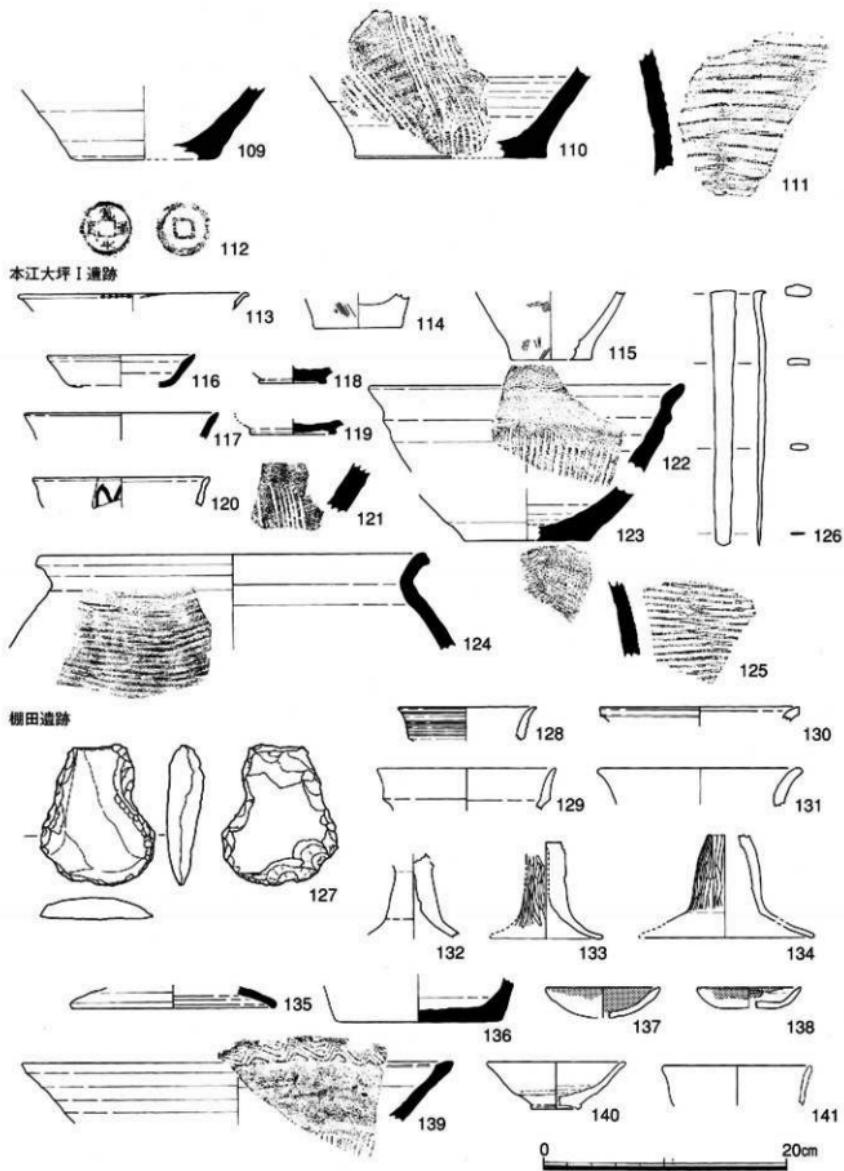
二口遺跡



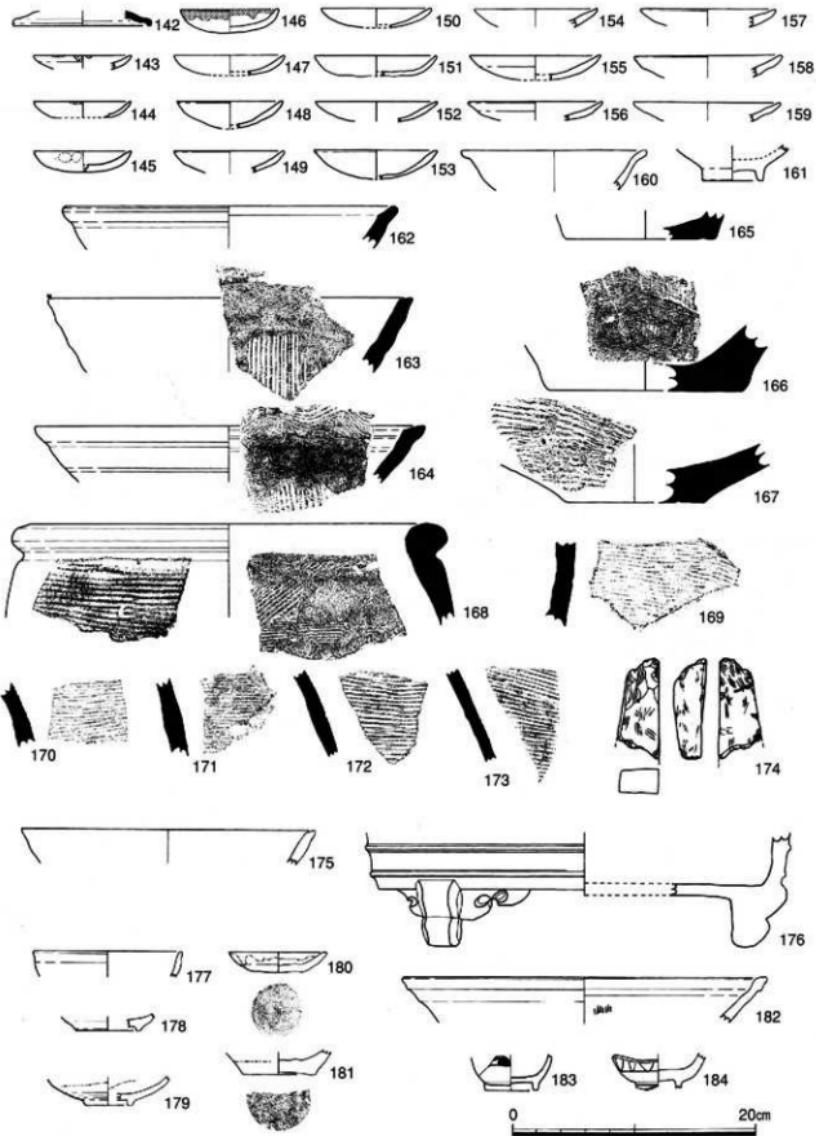
本江畠田Ⅰ遺跡



図版4 二口・本江畠田Ⅰ遺跡出土遺物実測図

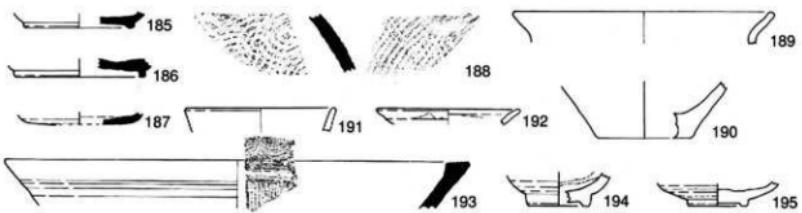


図版5 本江烟田I・本江大坪I・棚田遺跡出土遺物実測図

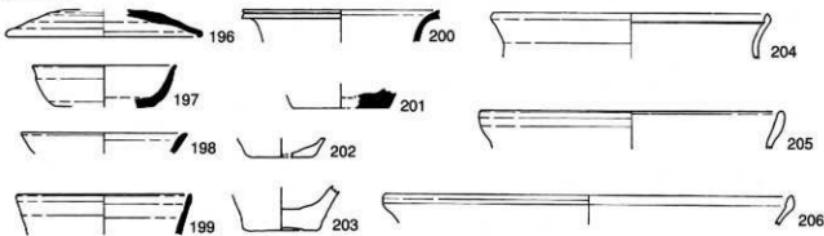


図版6 安吉遺跡出土遺物実測図

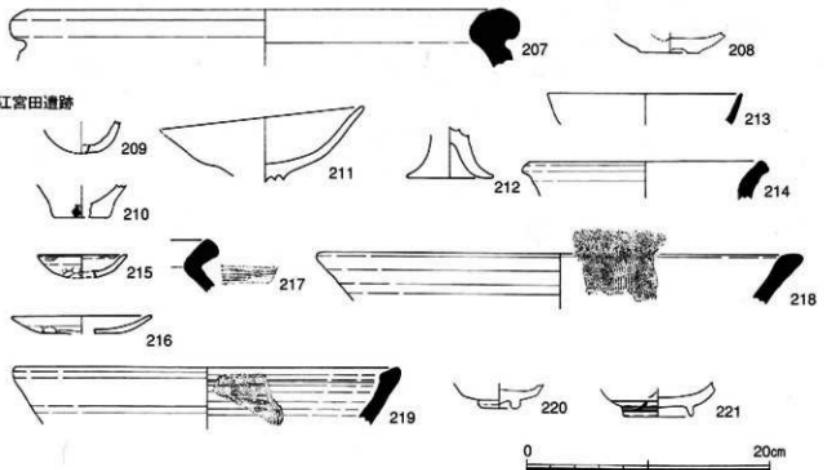
本田天水遺跡



本田杉田遺跡

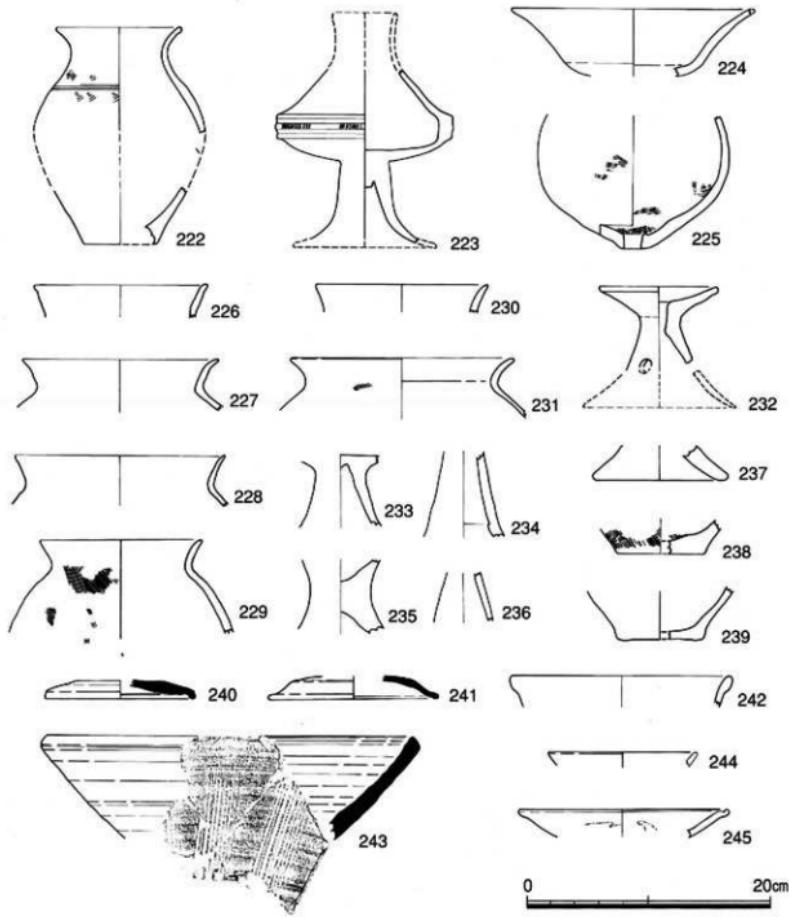


本江畑田Ⅱ遺跡

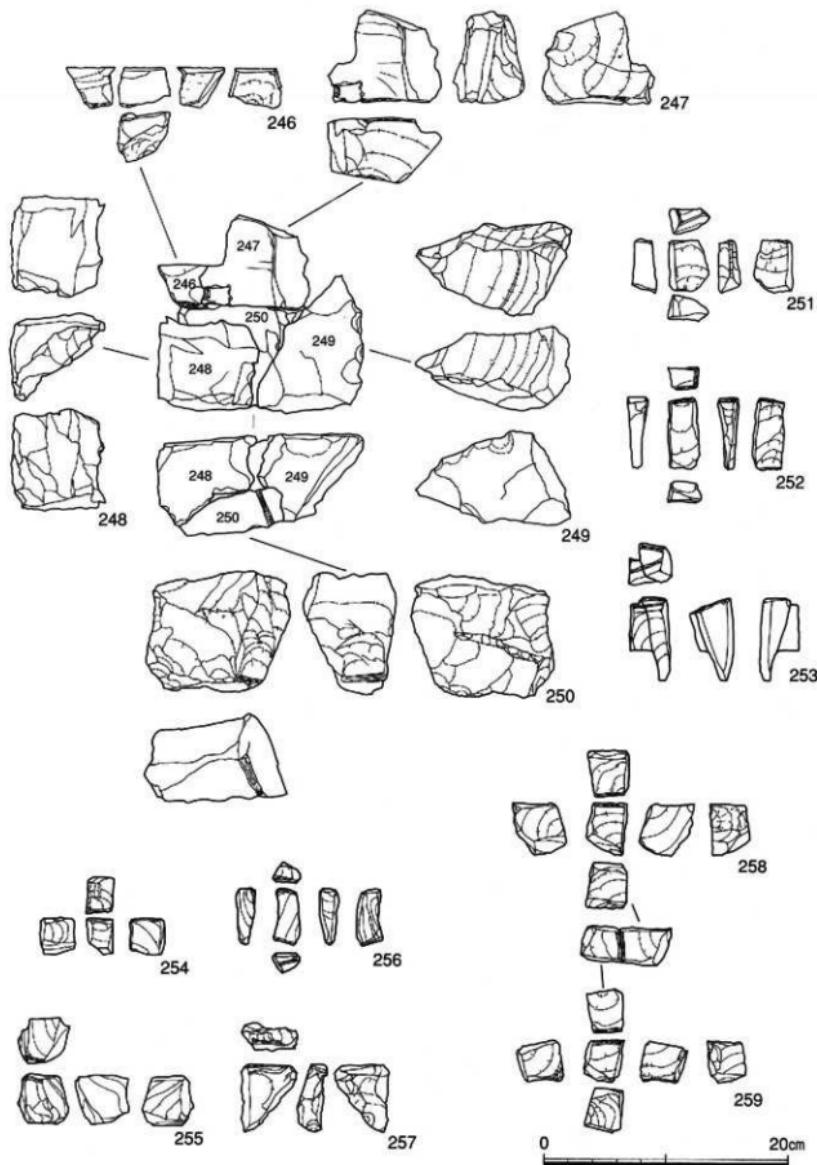


0 20cm

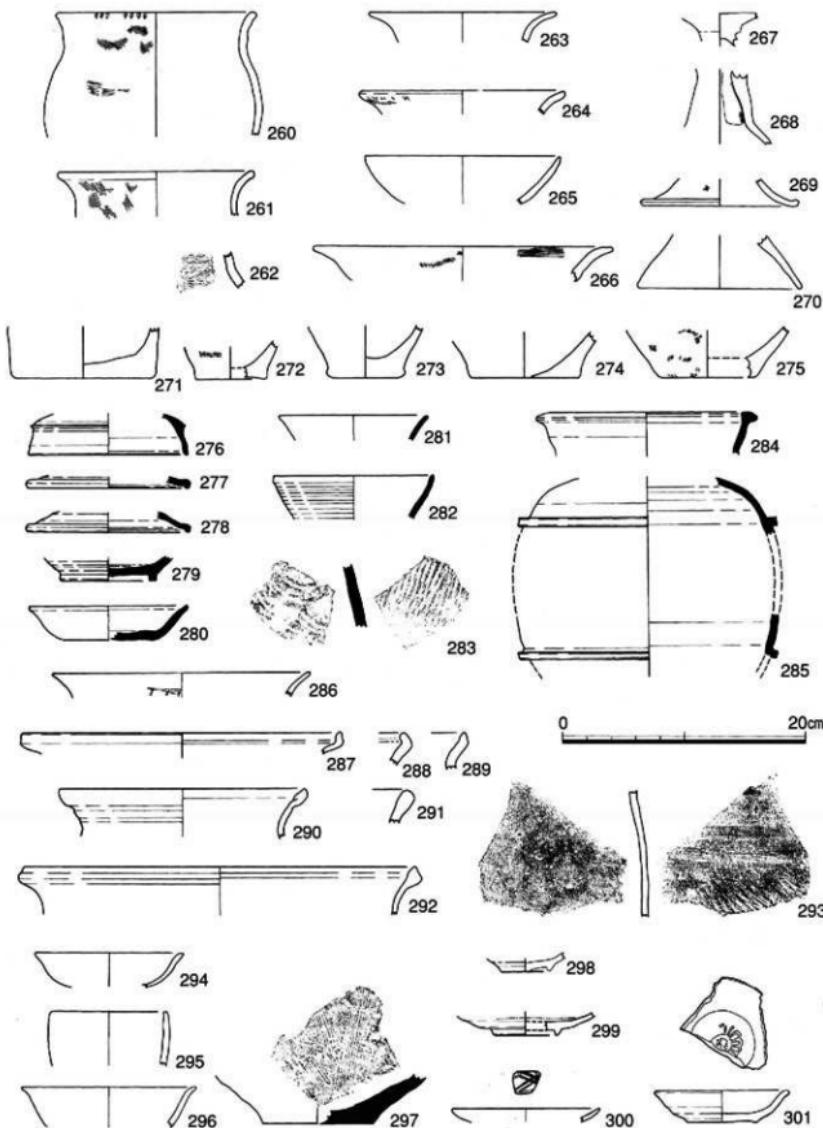
図版7 本田天水・本田杉田・本江畑田Ⅱ・本江宮田遺跡出土遺物実測図



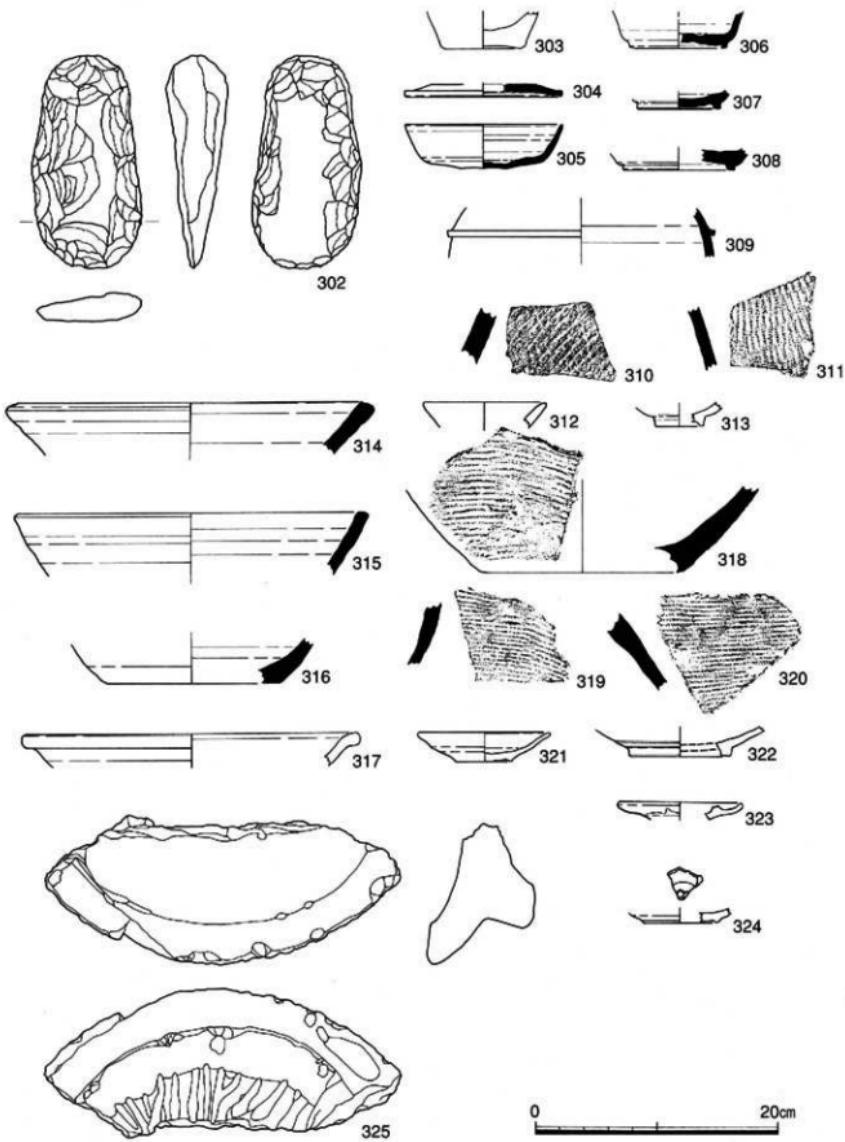
図版8 本田宮田遺跡出土遺物実測図（1）



図版9 本田宮田遺跡出土遺物実測図（2）



図版10 本田烟田遺跡出土遺物実測図



図版11 分布調査採集遺物実測図



作業風景



作業風景

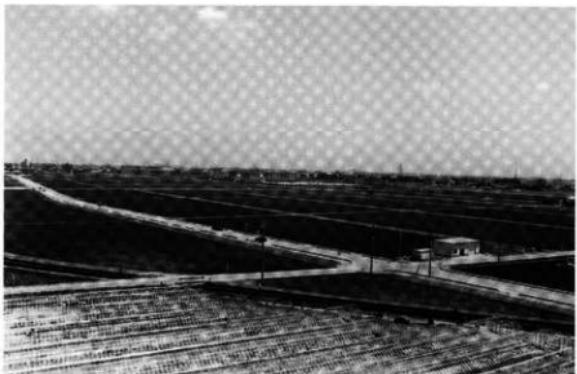


トレンチ完掘状況

写真図版 2



二口，安吉遺跡遠景



棚田，
二口五反田遺跡遠景



本江烟田 I・II，
本江大坪 I・II 遺跡遠景

写真図版 3



二口油免遺跡

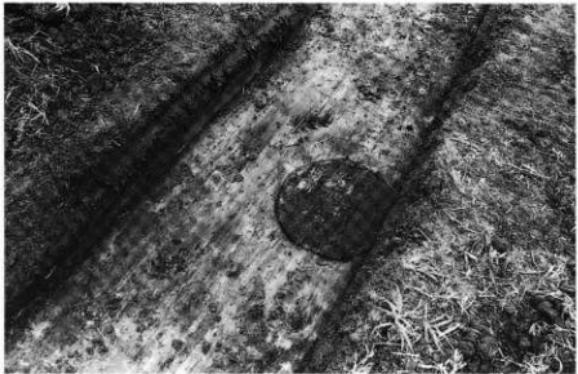


二口五反田遺跡

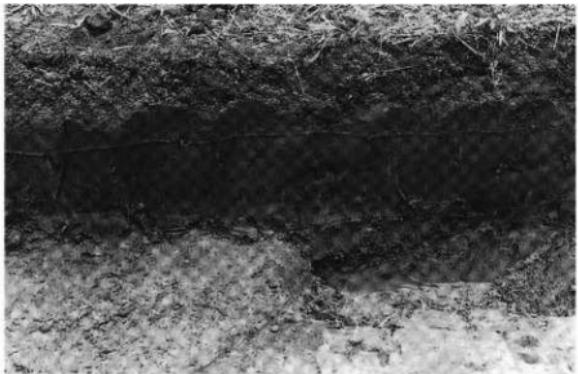


二口五反田遺跡

写真図版 4



二口五反田遺跡



二口遺跡層序

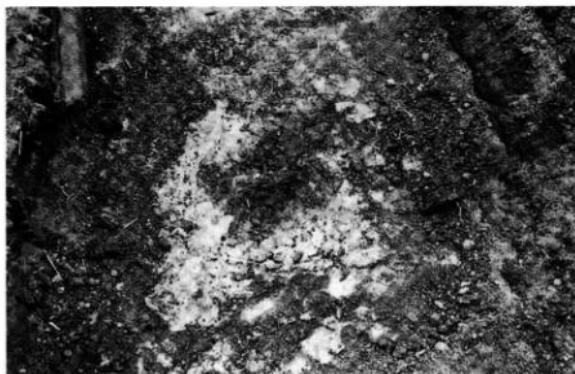


二口遺跡

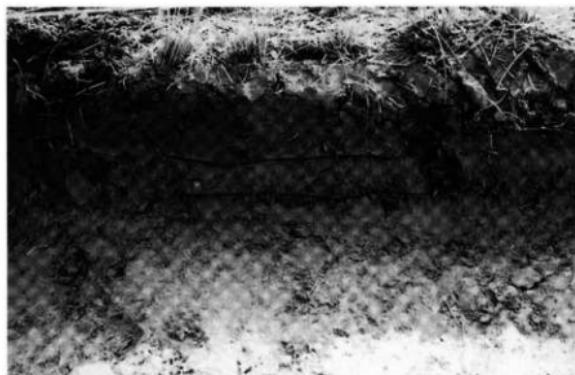
写真図版 5



二口遺跡

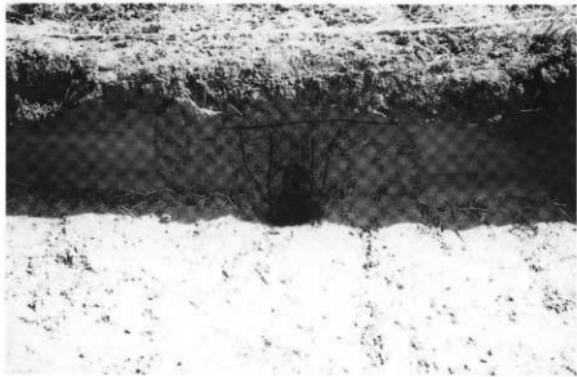


二口遺跡

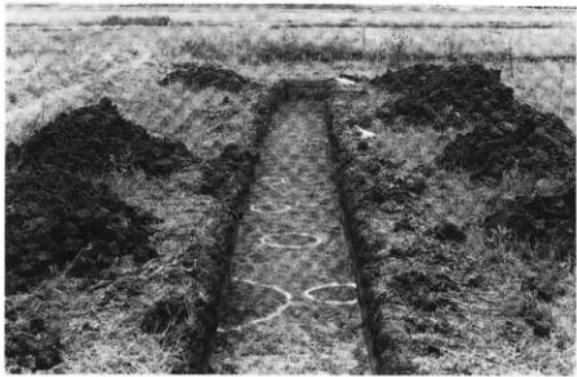


本江畠田 I 遺跡層序

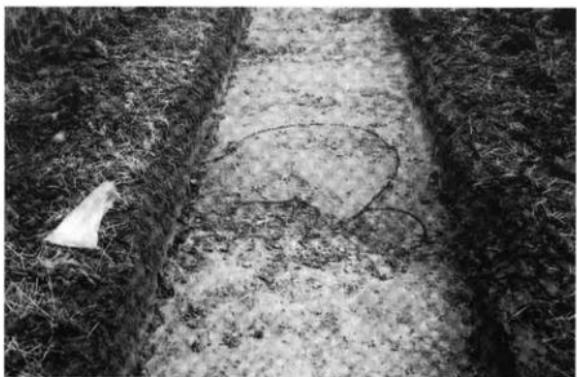
写真図版 6



本江畠田 I 遺跡柱痕



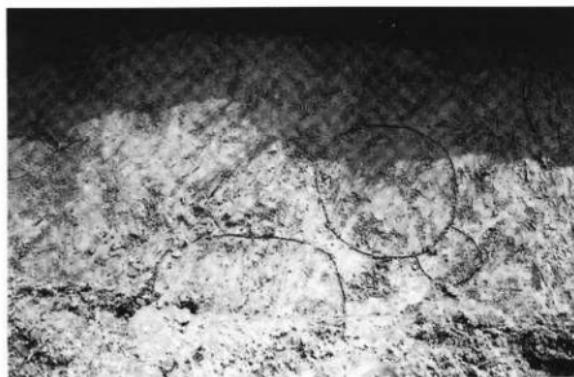
本江畠田 I 遺跡柱痕



本江畠田 I 遺跡



本江畑田 I 遺跡



本江畑田 II 遺跡

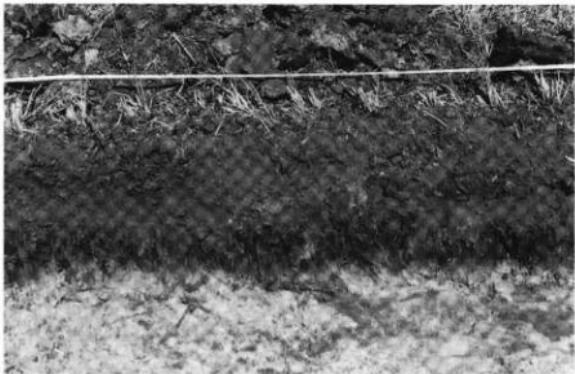


本江大坪 I 遺跡

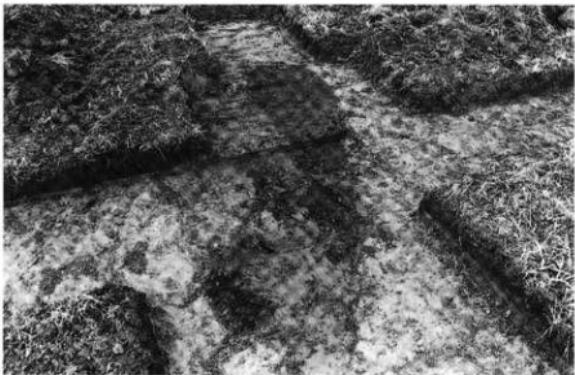
写真図版 8



本江大坪 I 遺跡



本江大坪 II 遺跡層序



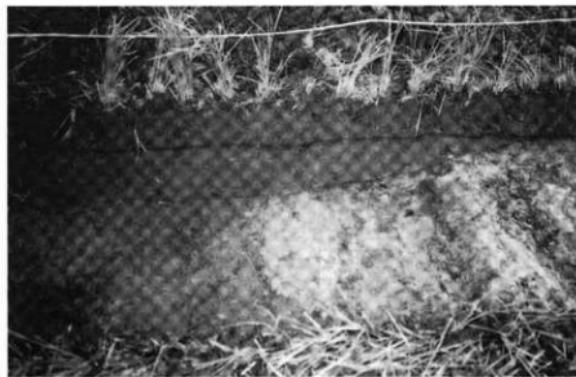
棚田遺跡



棚田遺跡



棚田遺跡



安吉遺跡

写真図版10

安吉遺跡



安吉遺跡

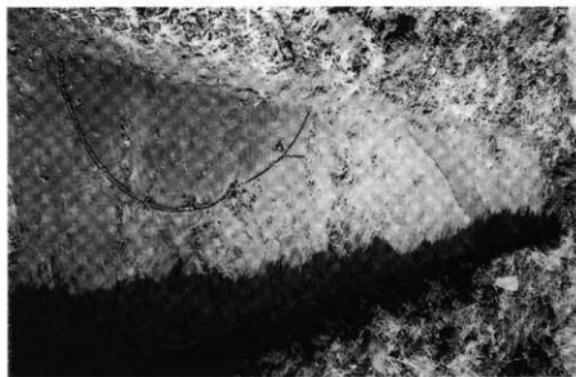


安吉遺跡





本田天水遺跡層序



本田天水遺跡



本田杉田遺跡

写真図版12

本田天水遺跡



本田宮田遺跡

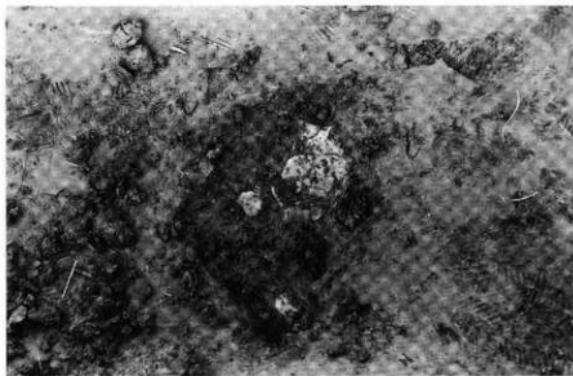


本田宮田遺跡





本田宮田遺跡



本田宮田遺跡



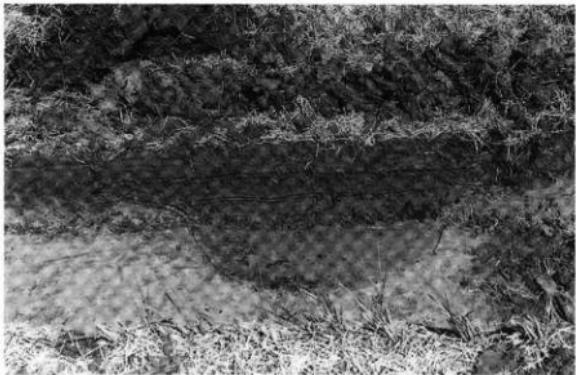
本田宮田遺跡

写真図版14

本田畠田遺跡層序

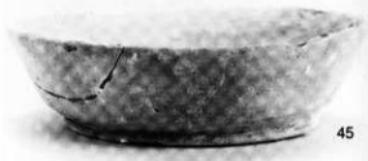
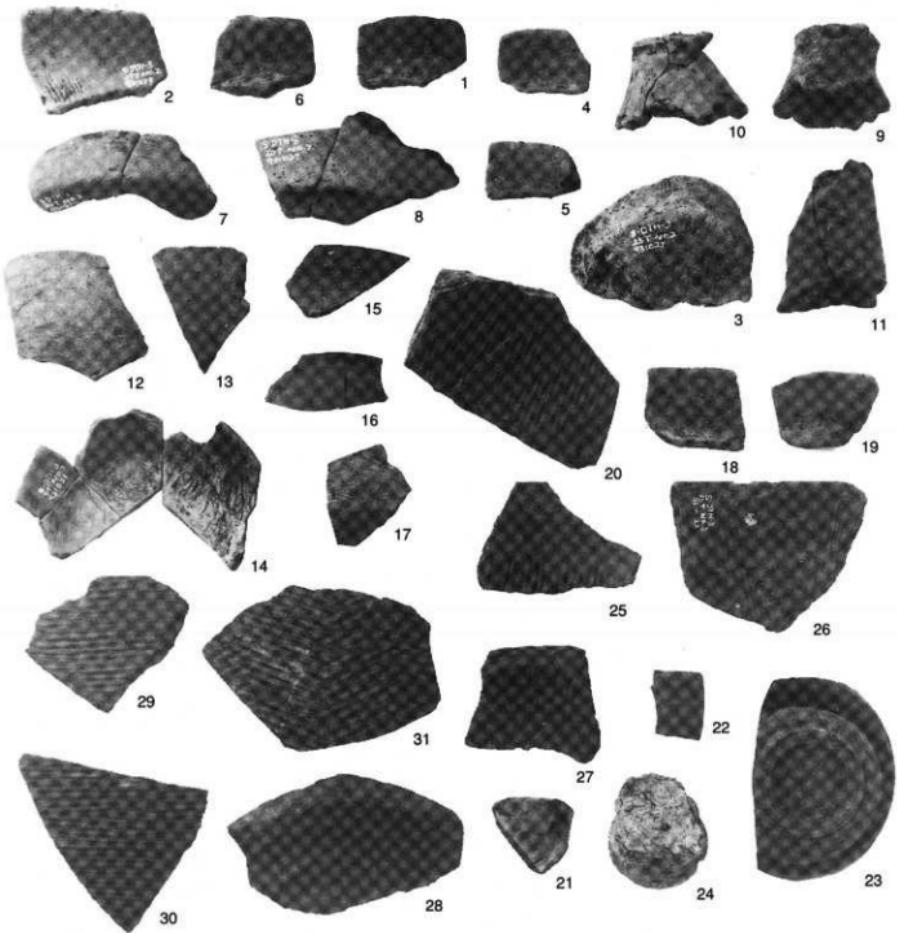


本田畠田遺跡

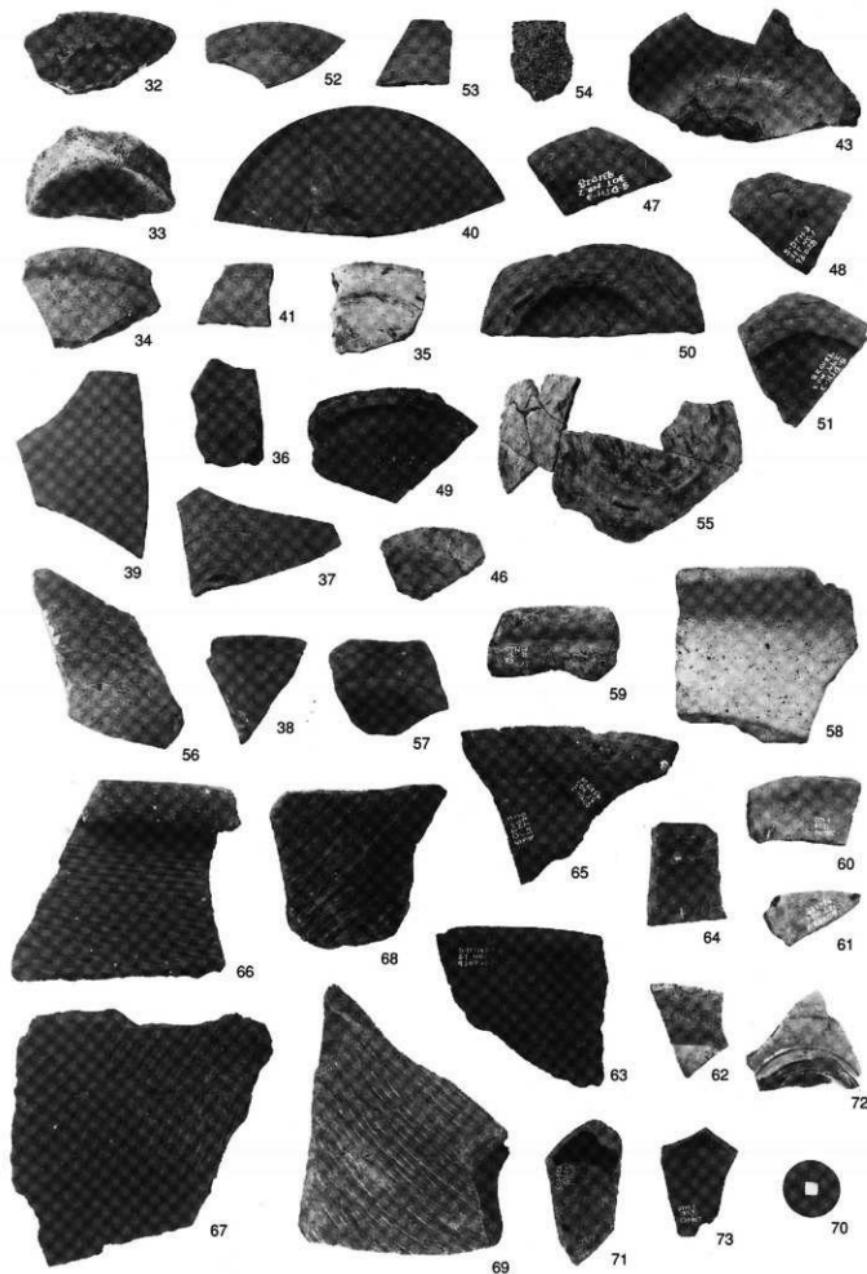


本田畠田遺跡

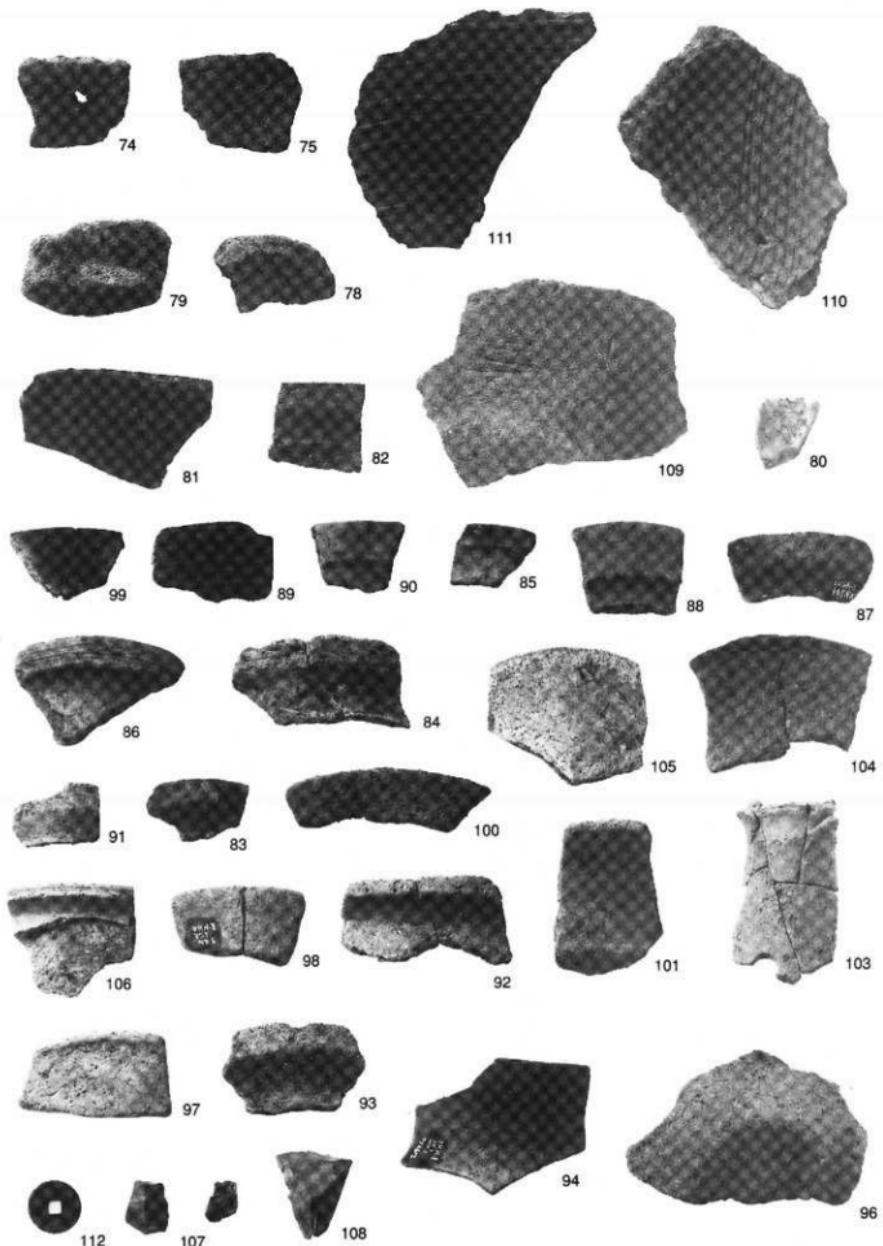




写真図版15 出土遺物 (S=1/2)



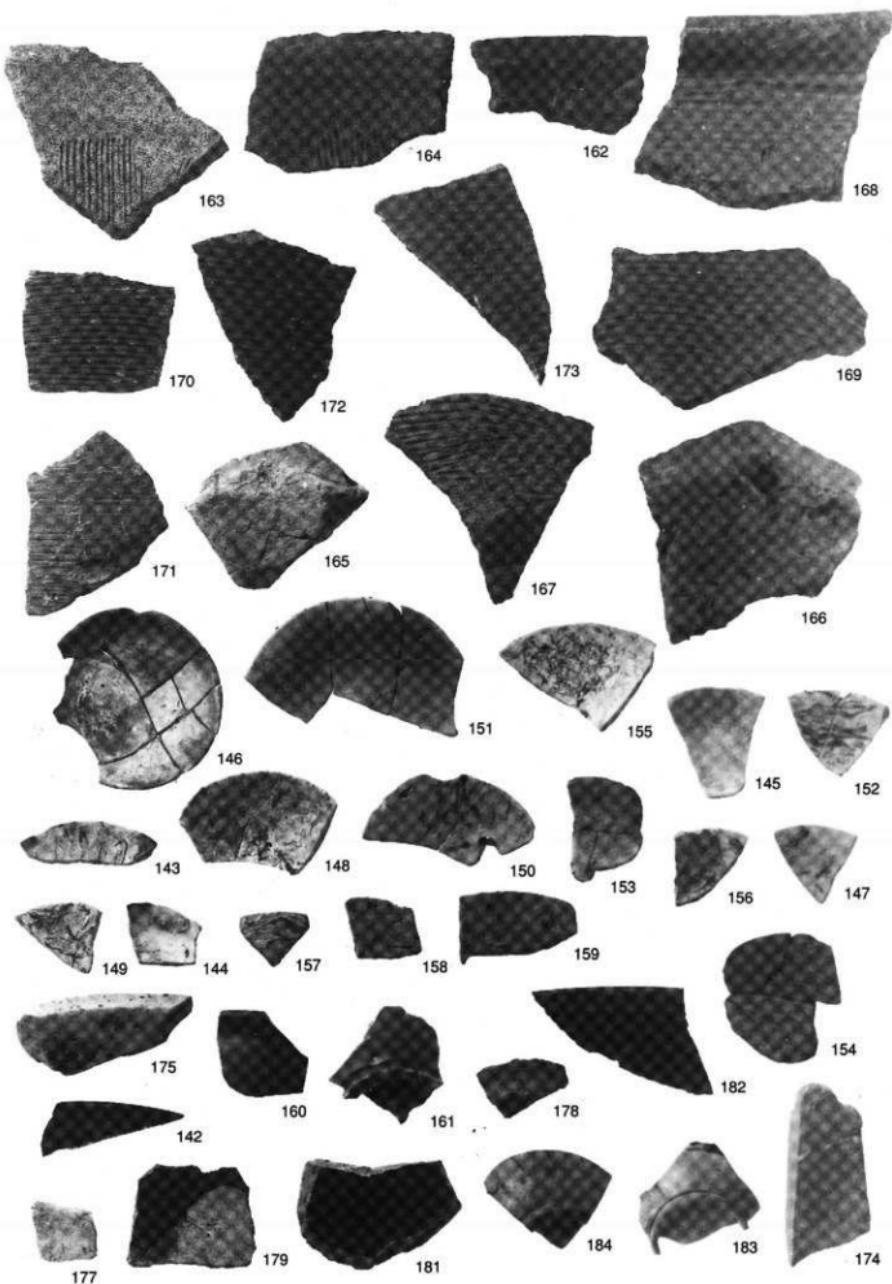
写真図版16 出土遺物 (S=1/2)



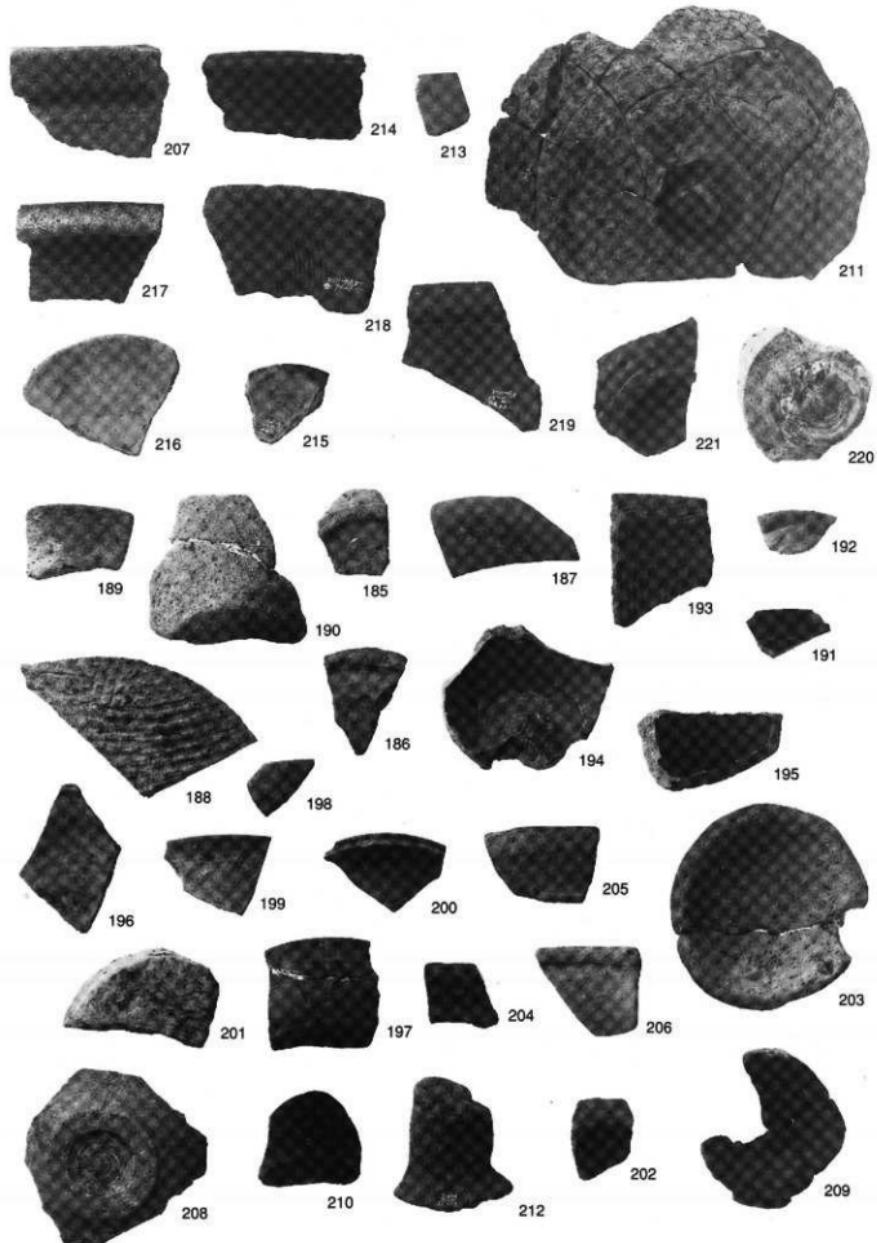
写真図版17 出土遺物 (S=1/2)



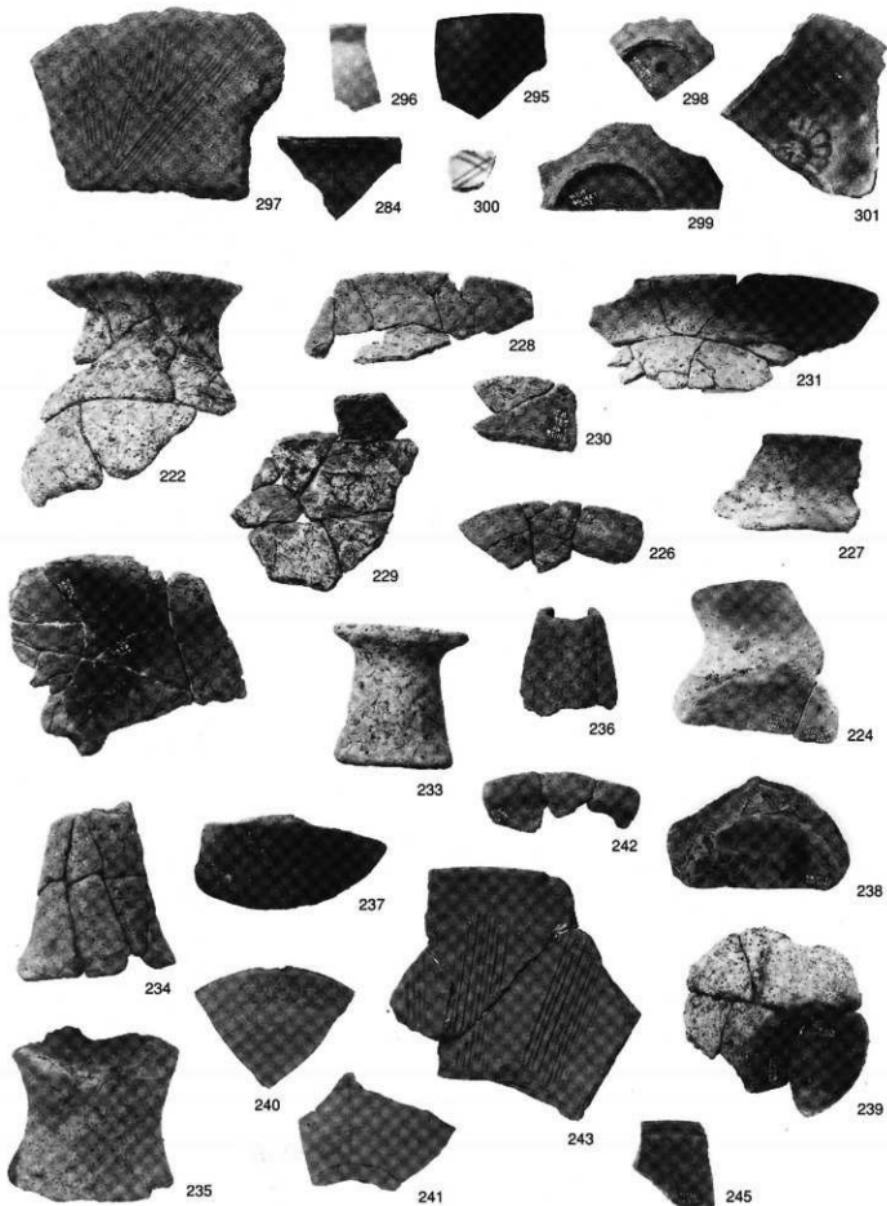
写真図版18 出土遺物 (S=1/2)



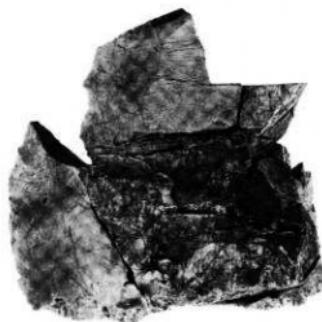
写真図版19 出土遺物 (S=1/2)



写真図版20 出土遺物 (S=1 / 2)



写真図版21 出土遺物 (S=1/2)



—



247



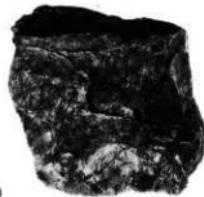
246



258・259



253



250



252



254



249



248



251



256

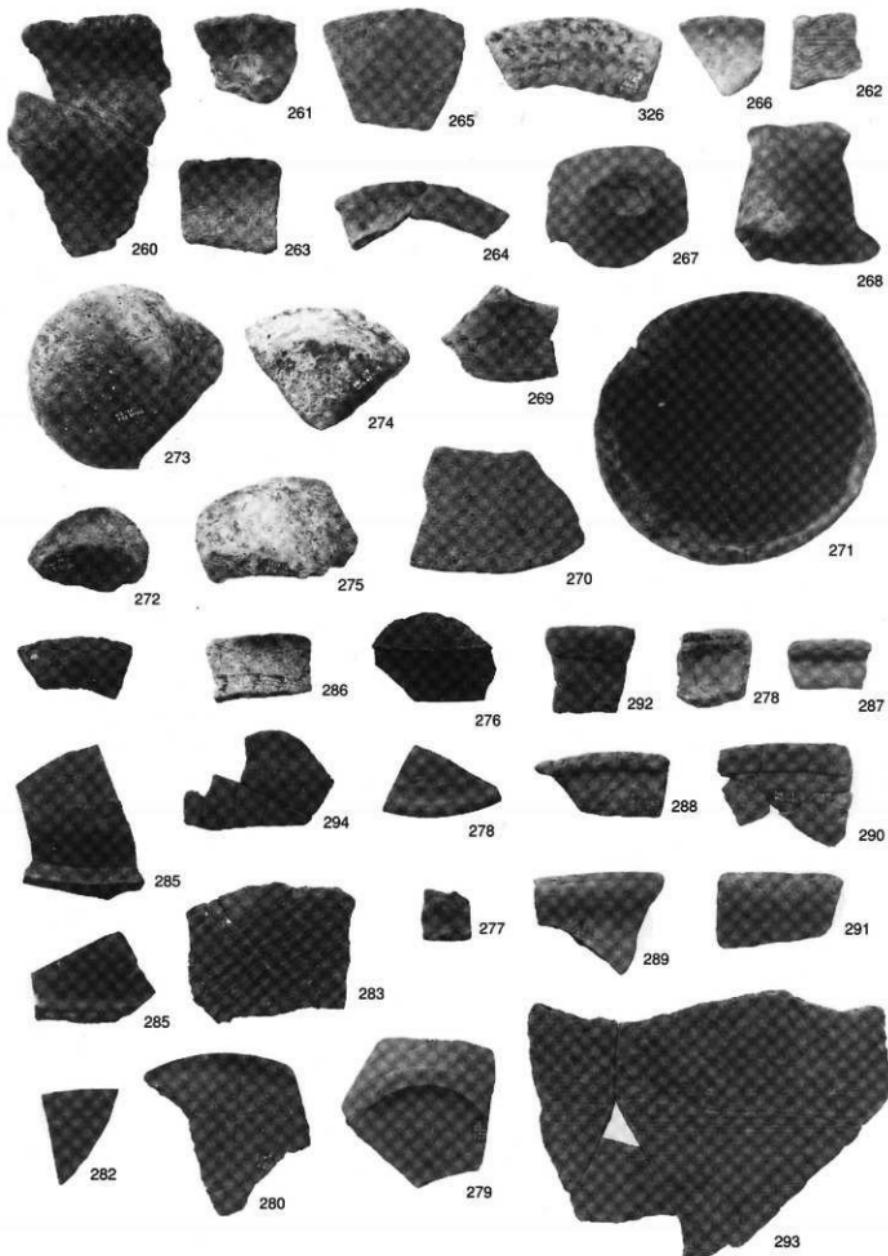


255

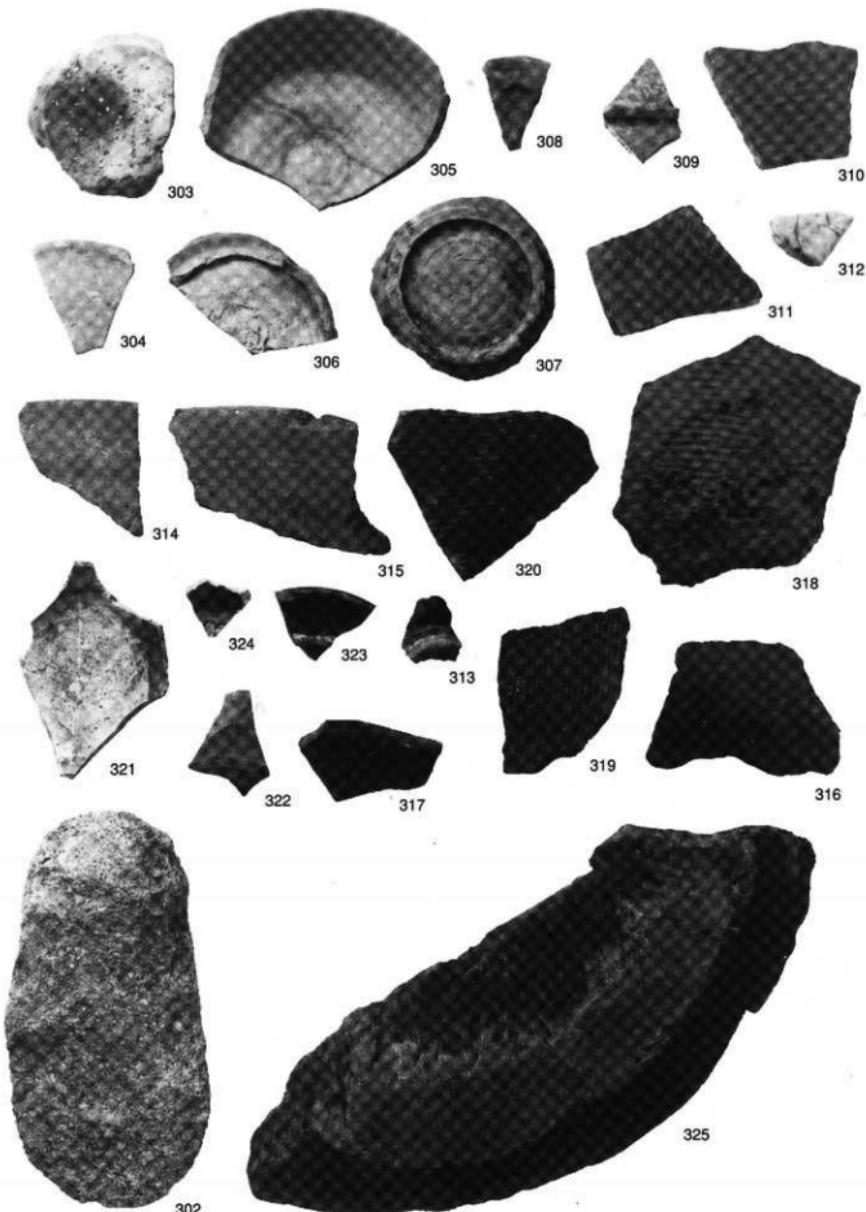


257

写真図版22 出土遺物 (S=1/2)



写真図版23 出土遺物 (S=1/2)



写真図版24 出土遺物 (S=1 / 2)



77



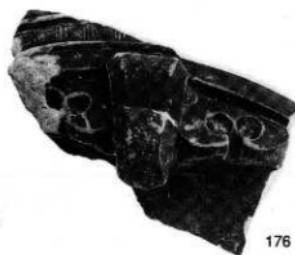
76



127



180



176



102

写真図版25 出土遺物 (S=1/2)



写真図版26 出土遺物 (S=1 / 2)

報告書抄録(1)

ふりがな	だいもんとうぶらくまいそうぶんかせきはつくちょうさほうこく	けんえいほじょうせいひじょうにともなうしきつちょうさほうこく
書名	大門東部地区埋蔵文化財発掘調査報告	-県営は場整備事業に伴う試掘調査報告-
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告	
シリーズ番号	12	
編著者名	尾野寺克実	
編集機関	大門町教育委員会	
所在地	〒939-02 富山県射水郡大門町二口1081	TEL.0766-52-6964
発行年月日	1997年3月	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査原因
		市町村	遺跡番号			
ふなくちあぶらめんいせき 二口油免遺跡	だいもんまちふなくち 大門町二口	163821	382047	36° 43' 21"	137° 03' 29"	県営は場整 事業に伴う 調査
ふなくちごたんだいせき 二口五反田遺跡	だいもんまちふなくち 大門町二口	163821	382001	36° 43' 19"	137° 03' 40"	
ふなくちいせき 二口遺跡	だいもんまちたなだ 大門町棚田	163821	382002	36° 43' 13"	137° 04' 02"	
ほんこうはなけだいらいせき 本江畑田Ⅰ遺跡	だいもんまちはんこう 大門町本江	163821	382057	36° 43' 03"	137° 03' 23"	
ほんこうおおつぱいろいせき 本江大坪Ⅰ遺跡	だいもんまちはんこう 大門町本江	163821	382054	36° 43' 01"	137° 03' 36"	
ほんこうおおつばにいせき 本江大坪Ⅱ遺跡	だいもんまちはんこう 大門町本江	163821	382055	36° 42' 48"	137° 03' 39"	
たなだいせき 棚田遺跡	だいもんまちたなだ 大門町棚田	163821	382049	36° 43' 05"	137° 03' 42"	
やすよしいせき 安吉遺跡	だいもんまちやすよし 大門町安吉	163821	382050	36° 43' 05"	137° 04' 19"	
やすよしにいせき 安吉Ⅱ遺跡	だいもんまちやすよし 大門町安吉	163821	382068	36° 42' 56"	137° 04' 11"	
ほんでんてんすいせき 本田天水遺跡	だいもんまちはんてん 大門町本田	163821	382051	36° 43' 04"	137° 04' 27"	
ほんでん杉田遺跡	だいもんまちはんてん 大門町本田	163821	382073	36° 42' 59"	137° 04' 41"	
ほんこうはたけだいせき 本江畑田Ⅱ遺跡	だいもんまちはんこう 大門町本江	163821	382058	36° 42' 52"	137° 03' 27"	
ほんこううみやたいせき 本江宮田遺跡	だいもんまちはんこう 大門町本江	163821	382056	36° 42' 37"	137° 03' 35"	
ほんでんみややたいせき 本田宮田遺跡	だいもんまちはんてん 大門町本田	163821	382053	36° 42' 49"	137° 04' 12"	
ほんでんはたけだいせき 本田畑田遺跡	だいもんまちはんてん 大門町本田	163821	382059	36° 42' 53"	137° 04' 31"	

報告書抄録(2)

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	調査原因
ふたくちあぶらめんいせき 二口油免遺跡	集落	弥生・古墳・奈良 中世	溝・土坑・穴	弥生土器・須恵器・土 師質土器	
ふたくちごたんだいせき 二口反田遺跡	集落	奈良・平安	溝・土坑・穴	弥生土器・須恵器・土 師質土器	
ふたくちいせき 二口遺跡	集落	縄文・中世	溝・土坑・穴	縄文土器・珠洲焼・土 師質土器・打製石斧	
ほんこうはたけだいせき 本江畠田Ⅰ遺跡	集落	弥生	溝・土坑・穴	弥生土器・珠洲焼・綠 色凝灰岩	玉造遺跡
ほんこうおむねばいせい 本江大坪Ⅰ遺跡	集落	奈良・平安	溝・土坑・穴	須恵器・土師質土器	
ほんこうおむねばいせい 本江大坪Ⅱ遺跡	集落	中世	溝・土坑・穴	珠洲焼	
たなだいせき 櫛山遺跡	集落	古墳・奈良・平安	溝・土坑・穴	土師質土器・須恵器	
やすよといせき 安吉遺跡	集落	中世	溝・土坑・穴	珠洲焼・上師質土器 瓦器・越中瀬戸焼	
やすよしにいせき 安古Ⅱ遺跡	集落	中世	溝・土坑・穴	珠洲焼	
ほんでんすいせい 本田大水遺跡	集落	奈良・平安	溝・土坑・穴	須恵器・土師質土器	
ほんでんすげたいせき 本田杉田遺跡	集落	奈良・平安	溝・土坑・穴	須恵器・土師質土器	
ほんこうはたけだいせき 本江畠田Ⅱ遺跡	集落	弥生・中世	溝・土坑・穴	弥生土器・珠洲焼・土 師質土器	
ほんこうみやたいせき 本江宮山遺跡	集落	弥生・中世	溝・土坑・穴	弥生土器・珠洲焼・土 師質土器	
ほんこんみやたいせき 本田宮田遺跡	集落	弥生	溝・土坑・穴	弥生土器・土師質土器 須恵器・綠色凝灰岩	
ほんこんはたけだいせき 本田畠田遺跡	集落	弥生・奈良・平安	溝・土坑・穴	弥生土器・珠洲焼・土 師質土器	玉造遺跡

大門町埋蔵文化財調査報告第12集

大門町東部地区埋蔵文化財発掘調査報告

- 県営は場整備事業に伴う試掘調査報告 -

発行日 平成9年3月

発行 大門町教育委員会

編集 大門町教育委員会

印刷 倍立業社高岡

